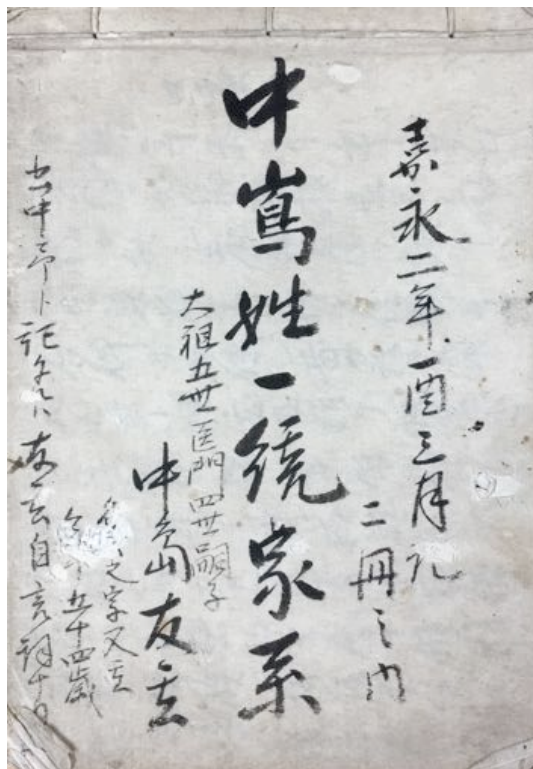


ISSN 2189-387X

中島醫家資料研究

第1卷 第2号

平成31年3月31日発行



通卷第3号

一般財団法人 中島醫家資料館

中島醫家資料研究 第1巻 第2号
目 次

論文

- 中島家の医療4部門における患者の分布について
…………… 木下 浩 …… 3

資料紹介

- 中島家所蔵の漢学者関係文書の紹介
—奥村竹亭、日下部鳴鶴、長尾雨山、永阪石埭、西薇山、山本竟山、山本梅崖、梁啓超ほか—
…………… 町泉寿郎 …… 31
- 『中寫姓一統家系』「中寫姓之由来」～「三ノ神子之系」
…………… 平崎真右 …… 44
- 『中寫姓一統家系』「本家ノ系」～「和吉家系」
…………… 松村紀明 …… 55
- 中島醫家資料館所蔵『胎産新書』解題・翻刻（1）
…………… 清水信子 …… 70

中島家の医療4部門における患者の分布について

木下 浩

中島醫家資料館 主任研究員

岡山大学医学部 客員研究員

はじめに

江戸時代後期から備前国邑久郡北地村(現岡山県瀬戸内市邑久町北池)で開業した中島家は、医師として患者を診察しただけではなく、産科や売薬、鍼灸の医療活動を行っていたことが、中島家の膨大な医学資料群の中に残された帳簿から明らかになっている。これら中島家の患者・売薬販売者記録の中でも特筆すべきは、それらの帳簿に患者や販売者の村名が明記されていることである。そこで本稿では、帳簿に記された患者・販売者の分布や4部門の医療活動の重なり具合などの比較を試みたい。

1 江戸期の邑久郡について

(1) 邑久郡内の村落の構成

中島家が開業した北地村がある備前国邑久郡は、現在の岡山県南部の岡山市と瀬戸内市、それに備前市の一部に当たる地域である。中島家の活動範囲は邑久郡が中心となっており、それぞれの帳簿を考察する前に、江戸末期の邑久郡と村の概略について見ていきたい。

まず、当時の邑久郡内の村数はどれくらいあったのであろうか。『改訂邑久郡史上巻』¹によると、文久二年(1862)の邑久郡内の村数は80か村となっている。また万延元年(1860)ごろ成立したと思われる「邑久郡大手鑑」²にも『改訂邑久郡史上巻』と同じ80か村が記載されているので、この80か村で当時の邑久郡を構成していたことは明らかである。

しかし、中島家のそれぞれの帳簿に記載された地名の中には、例えば「田淵」や「仁生田」のように80の村名にはないものがある。この二つの地名は北地村の枝村であり、その他にもいくつかの枝村が邑久郡内でも確認できる。あるいは「大橋」や「中正寺」など村内の字名で書かれていることもある。さらには『改訂邑久郡史上巻』や「邑久郡大手鑑」では西須恵村・東須恵村と分けられている村が、「須恵」とまとめて記載されていたり、西片岡村・東片岡村が単に「片岡」と記載されていたりすることもある。あくまでこれらの帳簿は中島家の記録であって、公式な記録ではないため、正確に80か村を意識して記録がされているわけではないのでこの様なことが起こるが、本稿ではこれらの枝村や字などは村へと復元して考察を試みている。

当時の80か村の面積や人口には差が大きい。村の様子は前掲「邑久郡大手鑑」に詳しく、また本稿の目的から外れるので詳細は触れないが、患者数との関係があるの

で、当時の村の人口についてはここで触れておきたい(表1)。

前掲「邑久郡大手鑑」によると、80か村中最多の人口は牛窓村(3,132人)であり、牛窓村を含む千人を超える人口を抱える村は8か村ある(人口の多い順に牛窓・鹿忍・尻海・虫明・小津・東片岡・邑久郷・神崎)。この8か村のうち7か村は邑久郡東部や南部の瀬戸内海沿岸に位置し、内陸部や西側吉井川沿いには見つからない。

一方、人口の記載のない間口・大浦を除く一番人口の少ない村は南谷村の9人であり、それに大山村(56人)上寺村(70人)横尾村(94人)の4か村が人口百人を割っている。これら4か村のうち、3か村は邑久郡西部の吉井川沿いに近い所にある。

80か村の人口の合計は4万4,739人³、それを80か村で割った559.2人、約560人が当時の邑久郡の一村あたりの平均人口となるが、その平均人口を下回る村が49か村ということで、平均人口より少ない村の方がやや多いと言える。その分布の傾向は、邑久郡東部と南部の沿岸部に比較的大きな村が多く、邑久郡の中央部を東西に流れる千町川沿いの郡中央部や郡西部の吉井川沿岸は小さな村が多い。

また、既に示したとおり、人口の多い村と少ない村との差が非常に大きい。最大人口の牛窓村(3,132人)は平均村人口の約5.6倍、最小の南谷村(9人)との比較では実に348倍もの人口格差がある。これが当時の邑久郡の村人口の概況である。

(2) 行政区分について

当時邑久郡は、岡山藩池田家の支配下にあった。「邑久郡大手鑑」によると、邑久郡内は4つの庄屋組合に分けられている。それは、「円張村嘉太郎組合」が19か村で5,915人、「富岡惣平次組合」が16か村で8,222人、「大ヶ嶋村義左衛門組合」が22か村で1万2,781人、「乙子村文蔵組合」が23か村で1万7,821人であり、4つの組合間で村人口にばらつきが見られる。また、分布を見ると、「富岡惣平次組合」は邑久郡北部、「円張村嘉太郎組合」は邑久郡中西部、「大ヶ嶋村義左衛門組合」は邑久郡中東部、「乙子村文蔵組合」は邑久郡南部と大まかに分けることができるが、邑久郡中部を中心に複雑に入り組んでいるところがあり、次に示す3つの区分とはだいぶ違っている。

(3) 山南と山北と旧長船地区

邑久郡内の地形について前掲『改訂邑久郡史上巻』では次のように記されている。

邑久郡の山脈は、牛窓町の東端蕪崎に起りて西走する阿弥陀山脈と、之れに続く豊原村大雄山脈と、裳掛村虫明黒井山より西走する玉葛山脈等が脊梁をなし、郡内を大体山北、山南に分つ。

阿弥陀山脈は、牛窓町の阿弥陀山を主峰として、小松原山、長尾山を連ね、大雄山脈長沼山、大辻山、龍王山を連ねて西走し、玉葛山脈は黒井山、玉葛山、四辻山

表1 江戸末期の邑久郡内の村と人口(単位 人)

大庄屋円張村嘉太郎組合	新	420	大庄屋富岡惣平次組合	下笠加	391	大庄屋大ヶ嶋村義左衛門組合	大ヶ嶋	281	大庄屋村乙子村文蔵組合	乙子	481
	五明	283		上笠加	289		長沼	734		神崎	1,115
	浜	612		南谷	9		潤徳	165		邑久郷	1,267
	川口	175		箕輪	214		円張	507		宿毛	688
	新地	250		福永	112		下山田	638		西片岡	612
	射越	278		福岡	838		上山田	435		正儀	821
	上寺	70		八日市	196		山手	582		久々井	577
	門前	200		長船	560		山田庄	461		犬島	109
	北地	556		服部	558		福元	311		東片岡	1,310
	向山	318		土師	878		豆田	591		藤井	335
	大富	586		牛文	524		北池	200		下阿知	443
	福山	247		福里	338		西須恵	466		上阿知	537
	久志良	482		磯上	883		東須恵	511		千手	342
	大山	56		飯井	646		虫明	1,540		鹿忍	2,419
	宗三	135		佐山	805		福谷	862		牛窓	3,132
	百田	126		鶴海	981		間口	0		大浦	0
	大窪	229					庄田	401		奥浦	777
	尾張	659					尻海	1,694		東幸崎	332
	包松	233					小津	1,325		西幸崎	499
							横尾	94		南幸田	541
				佐井田	801	北幸田	206				
				土佐	182	東幸西	617				
						西幸西	661				
計	5,915	計	8,222	計	12,781	計	17,821				
								総計	44,739		
								80か村平均	559		

※「邑久郡大手鑑」により筆者が作成

※間口村・大浦村については記載がないため便宜上0人と表示

等を連ねて西南に走り、其の余脈として桂山山脈が郡の中央に起る。北部和気郡との境界にある太平山脈は、国府村、鶴山村等北部一帯に隆起す。

斯くの如く、郡の東部と北部とは山岳多きも、中部より西部は土地概ね平坦にして、千町平野、山南平野を作る。

上記にあるように、邑久郡は北東部の旧邑久町虫明方面から南西方面へと連なる山々と、東部旧牛窓町蕪崎から西方面へと連なる山々が合わさった「大雄山脈」が邑久郡中央部を南北に分断する形でのびている。その南側を「山南平野」、北側を「千町平野」と郡史は述べている。この大雄山脈の南北分断が邑久郡内では大きな意味を持つ。郡史の言う大雄山脈の南側の山南平野が「邑久郡大手鑑」では「乙子村文蔵組合」であり、これはほぼ一致している。大雄山脈の北側の千町平野が「円張村嘉太郎組合」と「大ヶ嶋村義左衛門組合」であり、さらにその北の「桂山山脈」を越えると「富岡惣平次組合」となっている。ただし、「千町平野」の中に「富岡惣平次組合」の村があり、逆に「桂山山脈」の北にも「大ヶ嶋村義左衛門組合」の村があるなど複雑に絡み合っているが、なぜそのようなになったのかについては不明である。

さらに現在の行政区分で見ると（図1）、山南平野は旧牛窓町と、旧西大寺市から現在の岡山市へと合併された地域で、現在は岡山市と瀬戸内市牛窓町となる。また、千町平野は旧邑久町と、旧西大寺市から岡山市へと合併された地域であって、現在は岡山市と瀬戸内市邑久町、さらに瀬戸内市牛窓町の一部となっている。さらに、桂山より北方面は旧長船町で現在の瀬戸内市長船町と備前市となっている。つまり江戸時代の邑久郡は、現在では北部は旧長船町と備前市、中東部は旧邑久町と岡山市、南東部は旧牛窓町と岡山市に分けられている。

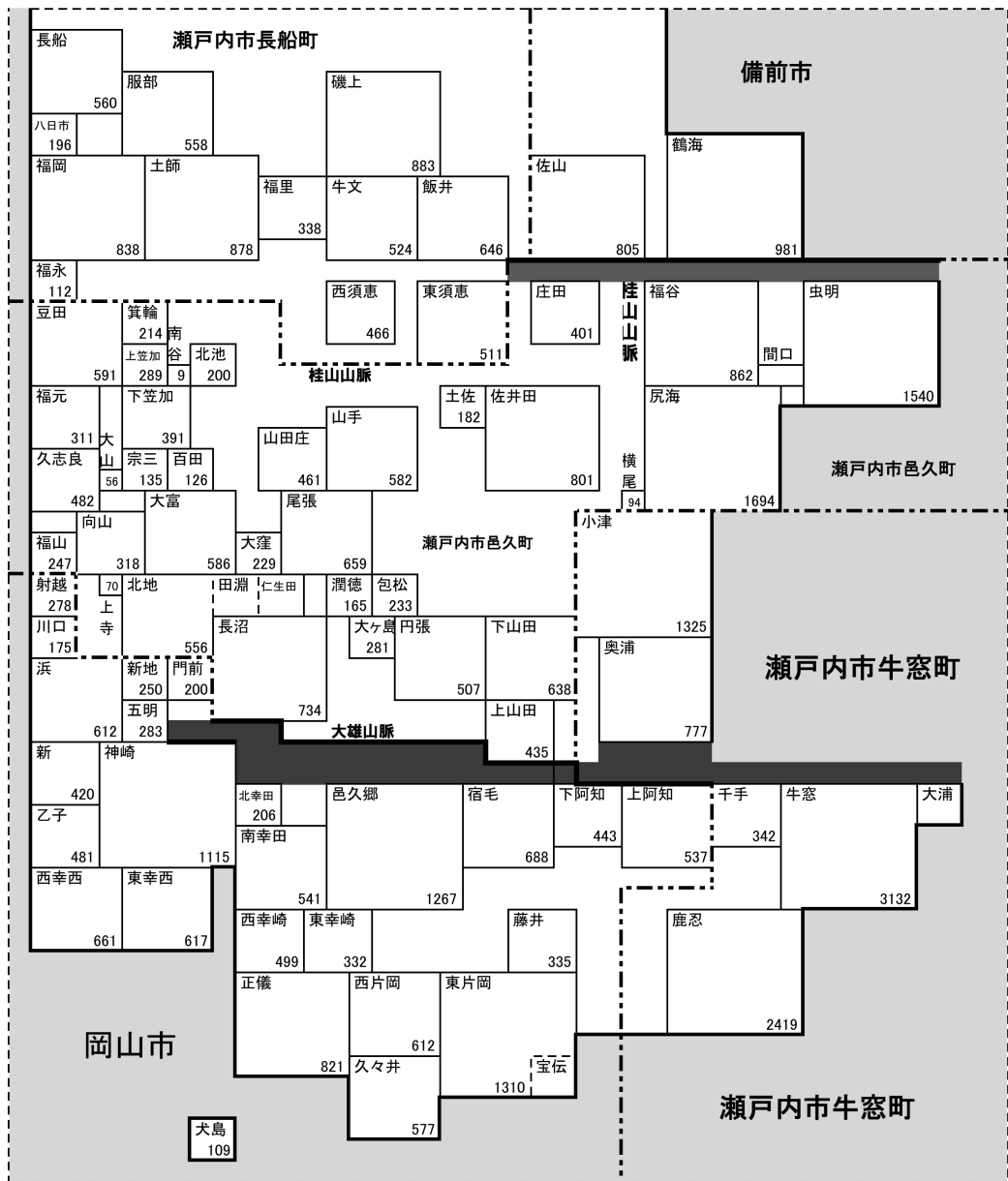
これらから、患者や販売者の圏域を考察していくうえで、当時の邑久郡を4つの大庄屋による区分ではなく、大雄山脈と桂山山脈で邑久郡を南北に3分割している地理的な3区分で考えていきたい。そのことは当時の村人も山南・山北という呼び方をしていたことから、村人の意識としても山南・山北の分け方があったと思われる。以下、大雄山脈以南を山南、大雄山脈と桂山山脈の間を山北、桂山より北方面を旧長船地区⁴と呼んで、区別していきたい。

なお、山南という呼び方については、現在も中学校名と公民館名にその名を残しており、読み方も「やまみなみ」ではなく「さんなん」ということが分かるが、山北という地名や呼称は現在ではほとんど残っていない。

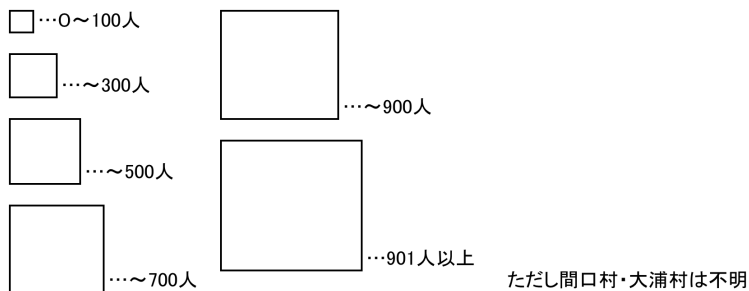
2 中島家の医療活動における患者の分布

ここからは中島家の4つの医療活動における患者や販売者の分布を個々に考察してみたい。便宜上、医療活動についてそれぞれ「配剤」「回生」「売薬」「鍼灸」と呼ぶ。

図1 現在における旧邑久郡の行政区分



邑久郡大手鑑(万延元(1860)頃)による村別人口



(1) 中島家の配剤について (表2図2参照)

「配剤」は中島家、特に中島友玄が患者を診察し、薬を処方したと考えられる患者名簿の記録である。この患者名簿は3冊残されており、それぞれ「配剤謝義姓名記」(以下「姓名記」)、「配剤謝義姓名録」(以下「姓名録」)、「配剤謝義人名籍」(以下「人名籍」)である⁵。残念ながらこの3冊には患者の診断名や具体的な服薬名は記録されていない。3冊とも嘉永七年(安政元)(1854)～明治四年(1871)までの17年間の患者名などが地域ごとに頁を分けて記載されている。それぞれの地域は「姓名記」は邑久郡東部、「姓名録」は東部以外の邑久郡と地元の北地村内、「人名籍」は邑久郡以外の郡部や他国の患者となっている。

3冊の詳しい分析の報告は拙稿「中島友玄の患者の診療圏」⁶を参照されたいが、本稿も「中島友玄の患者の診療圏」と同様に「姓名記」と「姓名録」の慶応三年(1867)までのデータを使用する。

「姓名記」は表紙に記されているように、邑久郡東部の23の地域の患者が記載されている。装丁は村別・地域別に頁が分かれており、患者総数は2,211人。23の地域の中で一番患者数が多いのは円張村(患者数424人、以下同様)、次いで大ヶ島村(404人)、山田(308人)、仁生田(306人)、田淵(202人)と続く。これに大窪村(119人)を加えた6つの地域が百人を超える患者数となっている。「山田」は下山田村と上山田村を合わせた表記であり、田淵・仁生田は北地村の枝村である。中島家の開業地北地村から東方面へ田淵、次に仁生田が隣接し、さらにその先に円張村が続く。大ヶ島は仁生田からやや南に、大窪は同じく仁生田からやや北にそれる。北地村に非常に近い地域の患者が多い。

「姓名録」は表紙に「邑久郡西方并村内」と記され、同じく装丁は村別の頁で、旧邑久郡西部の6村と村内(北地村)の2,120人の患者が記載されている。中島家が開業する北地村は旧邑久郡内でも中央やや西寄りにあるため、北地村より西の村数は少なく、記載されている村数は少ないが、6地域は全て枝村ではなく村である。一番遠い新村で約3km、そこから先は吉井川を隔てて上道郡となる。

中島家の開業地北地村の西に射越村と川口村、川口村から吉井川に沿って南に濱村、新村と続く。射越村から吉井川沿いに北に福山村、北地の南隣が新地村となっている。濱村が398人と邑久郡全体の中でも3番目の多さとなっている。さらに、射越村・福山村も200人を超える患者数を数えることから、やはり北地村に近い村の患者が多いことがわかる。

しかし、中島家の開業地から遠いほど患者が少ないわけではない。例えば土佐村の患者数2人に対し、北地村から直線距離で土佐村の倍近い尻海村の患者は9人いる。また、邑久郡東部の村でも患者がいない村も多い。山南である現在の瀬戸内市牛窓町の大半の地域は患者がいない。同じく旧長船地区もほとんど患者がいないが、それらの地域に病人がいなかったとは到底考えられない。そこで考えられるこれらの偏りは、

表2 中島家配剤の患者数

旧長船地区		村名	患者数(人)
		福永	
		福岡	
		八日市	
		長船	
		服部	
		土師	
		牛文	
		福里	
		磯上	
		飯井	
		佐山	
		鶴海	
		西須恵	15
		東須恵	
計		2村	15

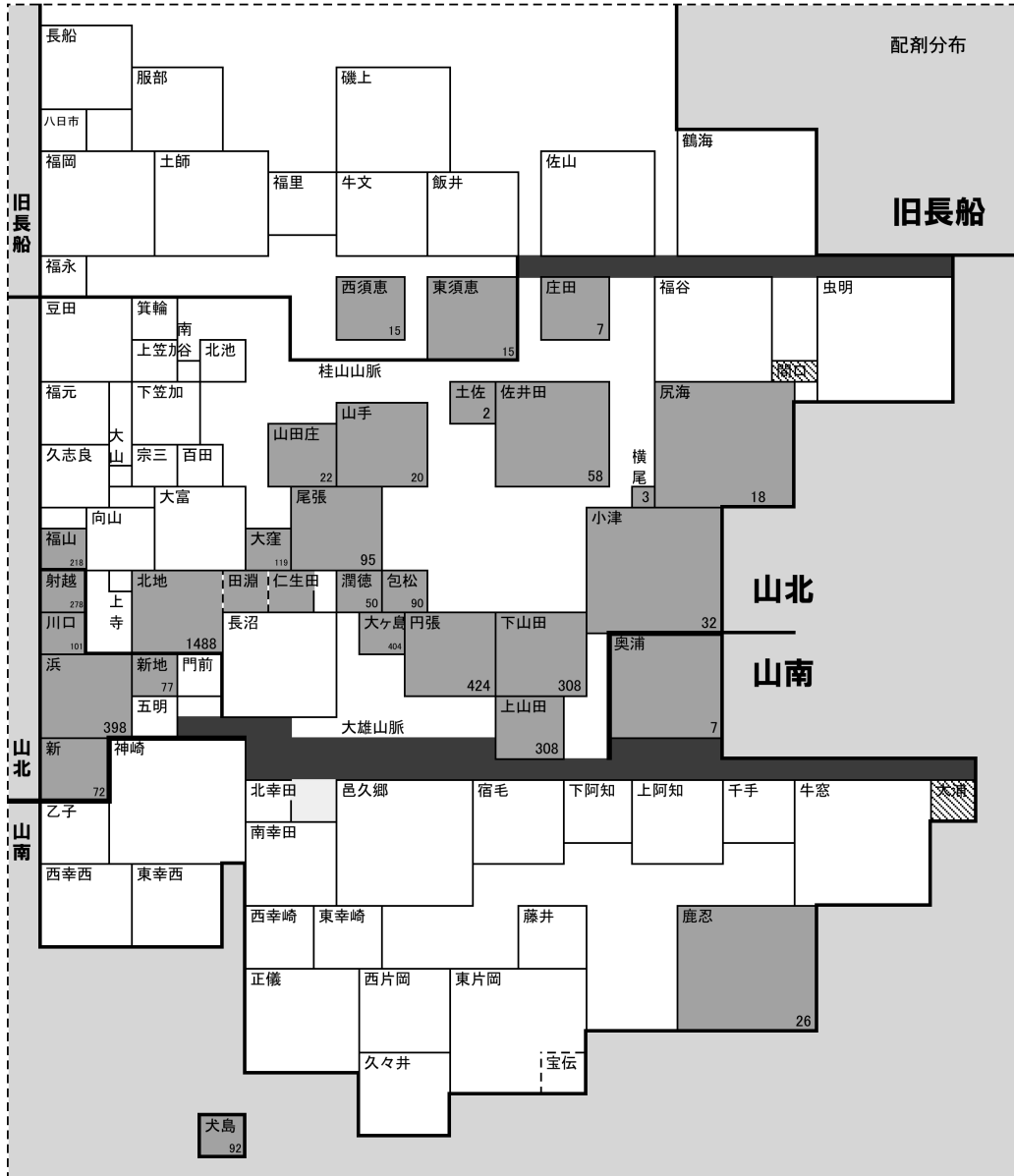
山北		村名	患者数(人)
		新村	72
		五明	
		濱	398
		川口	101
		新地	77
		射越	274
		上寺	
		門前	
		北地(田淵・仁生田)	1488
		向山	
		大富	
		福山	218
		久志良	
		大山	
		宗三	
		百田	
		大窪	119
		尾張	95
		包松	90
		下笠加	
		上笠加	
		南谷	
		箕輪	
		大ヶ島	404
		長沼	
		潤徳	50
		円張	424
		下山田	311
		上山田	
		山手(真徳)	20
		山田庄	22
		福元	
		豆田	
		北池	
		虫明	
		福谷	
		間口	
		庄田	7
		尻海(大土井)	18
		小津	32
		横尾	3
		佐井田	58
		土佐	2
計		23村	4283

山南		村名	患者数(人)
		乙子	
		神崎	
		邑久郷	
		宿毛	
		西片岡	
		正儀	
		久々井	
		犬島	92
		東片岡	
		藤井	
		下阿知	
		上阿知	
		千手	
		鹿忍(平山)	26
		牛窓	
		大浦	
		奥浦	7
		東幸崎	
		西幸崎	
		南幸田	
		北幸田	
		東幸西	
		西幸西	
計		3村	125

合計	
28村	4423

中島家の医療4部門における患者の分布について

図2 配剤の患者がいる村の分布



●...配剤の患者がいる村(口内の数は患者数)
ただし間口村・大浦村は不明

当時の医師の診療圏が関係すると思われる。邑久郡 80 か村の中には、医師が在住する村がいくつもあり、その村や近辺の村の病人はその在村の医師が中心となって診療していた。逆に近くの村に医師がいない村民は他の医師の診療圏に組み込まれていったと考えられる。それによってすぐ隣接している村でも中島家には診療に行かず、それぞれの在村の医師に診察してもらった結果、ただ距離が近いだけで患者が来るのではなく、中島家に診察を受けに来る患者の住んでいる村の分布に偏りが見られるようになったと思われる⁷。例えば、北地村のすぐ北の大富村は、隣接しているにもかかわらず中島家の患者が一人もいない。それは大富村に生田という医師が在住し、患者を診察していたからと思われる。

開業地北地村の患者は980人と圧倒的に多い。この数は「姓名記」と「姓名録」を合わせた邑久郡全体の中でも約23%を占める。これは中島家が地元の医療に従事した在村医であることを表すものである。14年間で980人ということは、年平均約70人、月平均約5.8人が中島家の診療を受けたことになる。

なお、「人名籍」に記載してある「島」の患者105人のうち、92人は犬島の患者であり、犬島は当時の旧邑久郡80か村の中に含まれているので、ここではそれもデータに組み込んでおり、「姓名記」2,211人と「姓名録」2,120人に、山南の犬島92人を加えた4,423人が邑久郡の配剤患者の合計人数となっている。

(2) 中島家の回生について (表3図3参照)

「回生」とは産科の中の母体を救う(回生させる)術式のことを言う。通常の正常分娩は産婆が行なうが、異常分娩などについては中島家の医師が出張して回生術を行い、母体の命を救った。回生についての詳細は「中島友玄の『回生鉤胞(代)臆』を読む」⁸および『『回生鉤胞代臆』からみた中島友玄の産科医療』⁹を参照されたい。

中島家が残した帳簿は「回生鉤胞(代)臆」1冊で、天保五年(1834)から明治三年(1870)までの患者名や村名などが記載されている。ただし天保九年(1838)～天保十四年(1843)間の患者名は記載されていないので、実質31年間の記録となる。患者は「柳之介内」や「佐次郎嫁」、「義八女」などと記載され、直接お産した女性の名前が記載されているケースはほとんど見られない。患者数は年号不明の患者も合わせて275人が記載されているが、そのうち村名が判明できたのは266人、患者がいる村数は43か村で、配剤の約1.6倍の村数となっている。

患者分布の地域的傾向を探ってみると、配剤とは違った特徴が見られる。それは中島家の開業地である北地村を中心に、近いほど患者数が比較的多いということである。一番患者数が多いのは地元北地村で44人、二位以下は少し人数が減って18人の乙子村、16人の五明村、15人の向山村と南西方面の近隣の村が続く。以下も、やや遠い西片岡村の12人を除くとほぼ半径4km以内に患者数の多い村はおさまっている。人口の多い尻海村や牛窓村などは、本来は需要が多いと思われるが、遠方であるため

中島家の医療4部門における患者の分布について

表3 中島家の回生の患者数

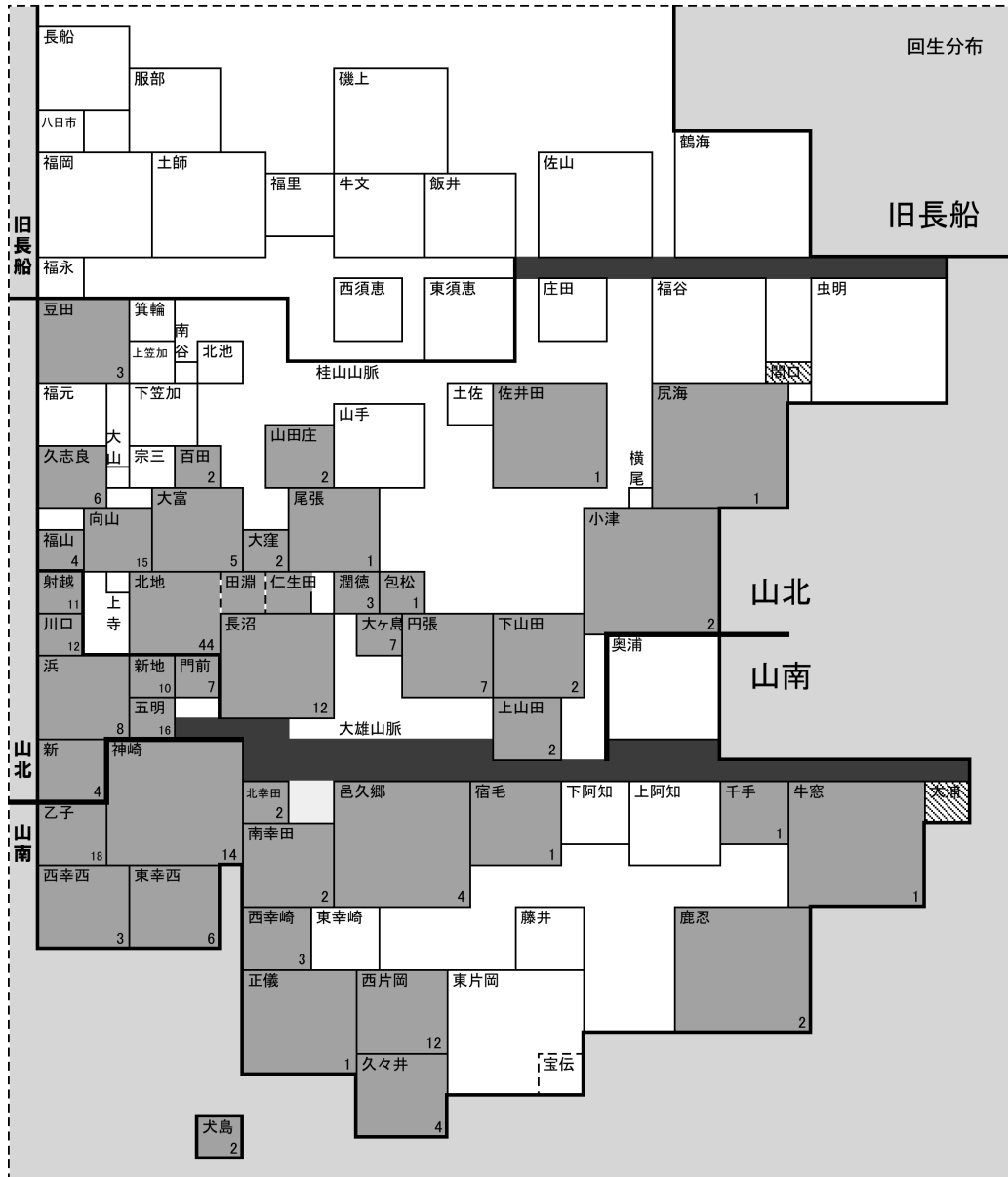
	村名	患者数(人)
旧長船地区	福永	
	福岡	
	八日市	
	長船	
	服部	
	土師	
	牛文	
	福里	
	磯上	
	飯井	
	佐山	
	鶴海	
	西須恵	
東須恵		
計	0村	0

	村名	患者数(人)
山北	新村	4
	五明	16
	濱	8
	川口	12
	新地	10
	射越	11
	上寺	
	門前	7
	北地(田淵・仁生田)	44
	向山	15
	大富	5
	福山	4
	久志良	6
	大山	
	宗三	
	百田	2
	大窪	2
	尾張	1
	包松	1
	下笠加	
	上笠加	
	南谷	
	箕輪	
	大ヶ島	7
	長沼	12
	潤徳	3
	円張	7
下山田	2	
上山田	2	
山手(真徳)		
山田庄	2	
福元		
豆田	3	
北池		
虫明		
福谷		
間口		
庄田		
尻海(大土井)	1	
小津	2	
横尾		
佐井田	1	
土佐		
計	27村	190

	村名	患者数(人)
山南	乙子	18
	神崎	14
	邑久郷	4
	宿毛	1
	西片岡	12
	正儀	1
	久々井	4
	犬島	2
	東片岡	
	藤井	
	下阿知	
	上阿知	
	千手	1
	鹿忍(平山)	2
	牛窓	1
	大浦	
奥浦		
東幸崎		
西幸崎	3	
南幸田	2	
北幸田	2	
東幸西	6	
西幸西	3	
計	16村	76

合計	
43村	266

図3 回生の患者がいる村の分布



…回生の患者がいる村(口内の数は患者数)

ただし間口村・大浦村は不明

か患者数は1人であったりする。つまり急を要する産科の診療については、やはり開業地と患者との距離が患者在村数と大きく関係していると考えられる。

また、配剤と同じく、患者のいる村に偏りが見られる。配剤では患者のいなかった向山村や大富村、長沼村にも回生の患者は存在するが、近隣の下笠加村や山手村には配剤と同じく患者がいない。また回生は旧長船地区には全く患者がいないことも特徴的である。牛窓村には患者がいても、距離的にはそう変わらない福岡村や東須恵村には患者はいない。牛窓村も患者数は1人であるのでたまたま患者が出たと考えられなくもないが、それにしても旧長船地区に全く1人も患者がいないということは偶然で片付けるには無理があるだろう。

回生の患者がいる村の分布が配剤の分布と重なりを見せず、村数も配剤よりも多いということは、基本的には中島家は自家の回生の診療圏を持ちながらも、他村の産婆や医師たちとネットワークを持ち、協力しながら、産科に関わっていたということの意味する。特に異常分娩などの緊急時のお産では、自分の診療圏を越えて、より専門的でより高度な技術を持つ医師、つまり山北や山南地区では中島家がネットワークを通じて診察を依頼され往診していったと思われる。「回生鈎胞（代）臆」の中の「北齋」など他の医師は、中島家を呼んだ医師であろう。必然的に、中島家近辺の村の患者数が多くなるとともに、他に回生を扱う医師がいる地域の患者数が少なくなると考えられる。31年間で一人や二人などごく少数の患者数である遠くの村、例えば尻海村や牛窓村、鹿忍村などは多くの人口を抱え、産婆や医師もいたはずであるが、特殊な出産や難産などのときに緊急に特別に中島家が呼ばれていった、そのため31年間で数人という数になったのであろう。「回生鈎胞（代）臆」は配剤のように地区ごとの帳簿で、村ごとに頁が分けられて記録がされているわけではなく、ただ年代ごとに記載されていることから、地域別に予期されている診療ではなく、あくまで突発的な診療が中心だったことが推察される。

残念ながら邑久郡内にどのくらいの数の産婆がいるのか、どの村に産婆がいるのかについては資料がなく分からない。一方、中島家の回生のレベルについては、中島友玄が京都遊学中に産科を学んでいること、さらに友玄の父宗仙が書き写した産科の書や産科関係の蔵書などが数多く残されている¹⁰ことから、かなりのレベルであったと思われる。

（3）中島家の鍼灸について（表4・図4参照）

中島家はここまで見てきた配剤（診察）、回生（産科）の医療部門だけでなく、当時としては現在以上に医療部門で大きなポジションを占めていた鍼灸も行っている。鍼灸の内容や患者の分布は「鍼灸施治人名録」（文久二年（1862））、「鍼灸諸事代紳録」（文久三年（1863））、「鍼灸施治姓名録」の「邑久郡西南」、「邑久郡東」、「邑久郡北」、「上道郡・御野郡」、「和気郡・磐梨郡・赤坂郡・津高郡・児島郡」（いずれも文久三

表4 中島家の鍼灸の患者数

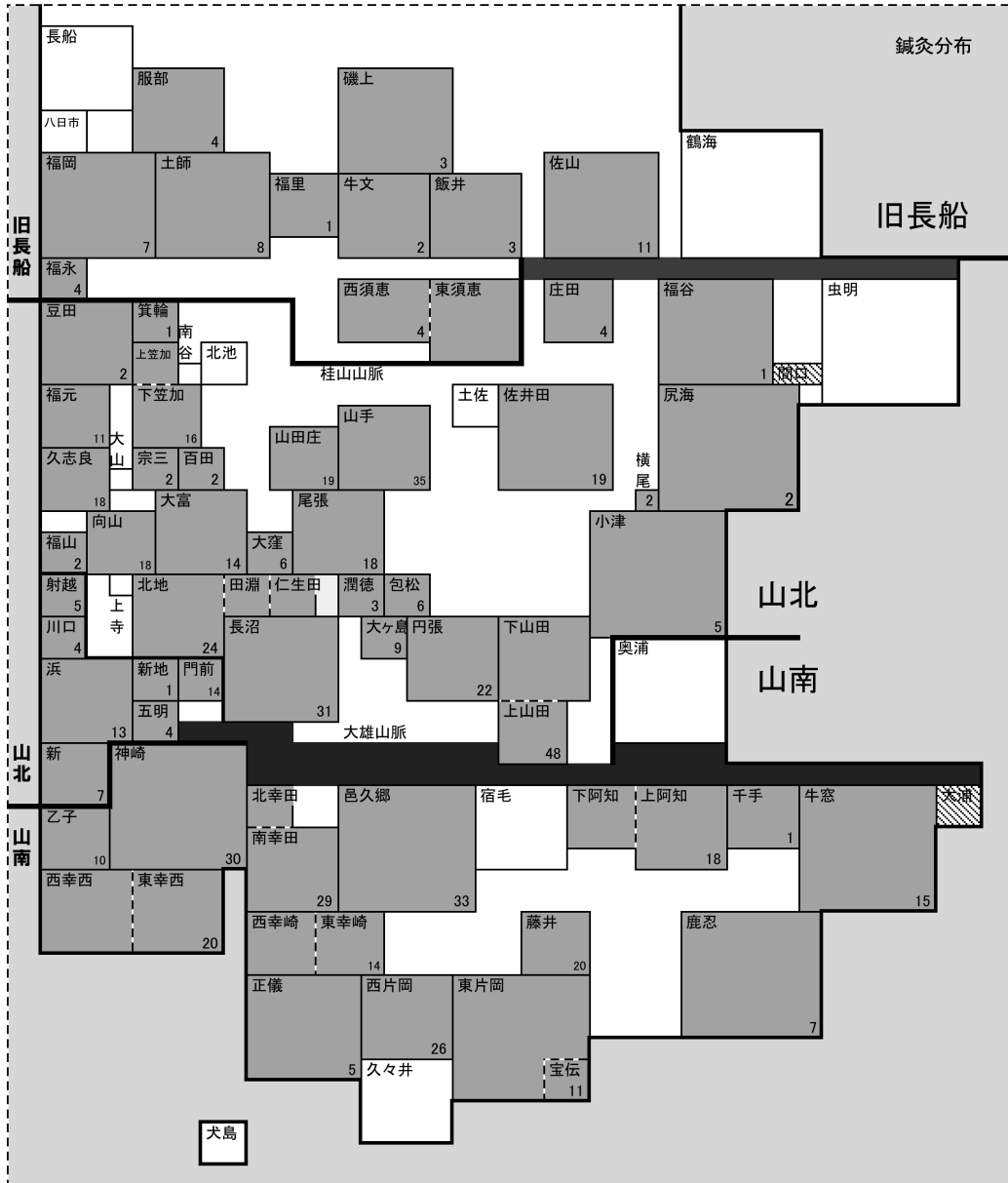
村名	患者数(人)
福永	4
福岡	7
八日市	
長船	
服部	4
土師	8
牛文	2
福里	1
磯上	3
飯井	3
佐山	11
鶴海	
西須恵	4
東須恵	
計	11村 47

村名	患者数(人)
新村	7
五明	4
濱	13
川口	4
新地	1
射越	5
上寺	
門前	14
北地(田淵・仁生田)	37
向山	18
大富	14
福山	2
久志良	18
大山	
宗三	2
百田	2
大窪	6
尾張	18
包松	6
下笠加	16
上笠加	
南谷	
箕輪	1
大ヶ島	9
長沼	31
潤徳	3
円張	22
下山田	48
上山田	
山手(真徳)	35
山田庄	19
福元	11
豆田	2
北池	
虫明	
福谷	1
間口	
庄田	4
尻海(大土井)	2
小津	5
横尾	2
佐井田	19
土佐	
計	36村 401

村名	患者数(人)
乙子	10
神崎	30
邑久郷	33
宿毛	
西片岡	26
正儀	5
久々井	
犬島	
東片岡	11
藤井	20
下阿知	18
上阿知	
千手	1
鹿忍(平山)	7
牛窓	15
大浦	
奥浦	
東幸崎	14
西幸崎	
南幸田	29
北幸田	
東幸西	20
西幸西	
計	18村 239

合計	
65村	687

図4 鍼灸の患者のいる村の分布



■ …鍼灸の患者がいる村(口内の数は患者数)

ただし間口村・大浦村は不明

年(1863))におさめられている。ここでは邑久郡内の患者の分布として「鍼灸施治姓名録」の「邑久郡西南」,「邑久郡東」,「邑久郡北」からデータを拾っていく。

邑久郡内の3冊を合わせた患者数は687人、これは文久三年(1863)から慶応元年(1865)の3年間のみ記録であるが、中島家の本業である配剤ほどではないにしろその患者数は多い。帳簿の体裁は、3冊とも村(地域)別に頁が作られ、そこに患者名が年代順に記載されている。つまり、あらかじめその村(地域)から患者が鍼灸のために中島家へ来院する、あるいは中島家の誰かが往診して鍼灸を施術するという事を想定している。これは配剤の帳簿と同じであり、患者の地域別の頁を作っていたということはそこからの一定量の患者をあらかじめ予測していたということである。このことから少なくとも中島家は、鍼灸にも力を入れていたということが分かる。

患者がいる村数は65か村、ただし、東須恵村・西須恵村は「須恵 東西共」、東片岡村・西片岡村は「両片岡」と東西や上下がある村は合わせて書かれ、しかもそこに記載されている患者名などの内容だけではどちらの村か特定できない事例がある。そこでそのような場合は両方の村に患者がいると仮定して2か村と数えた。

鍼灸の患者村数についての特徴は、65か村という村数の多さである。この数は他の部門と比べても多く、邑久郡全体の約80%、配剤の倍以上という村数になる。また、その分布には配剤のように特定の地域にだけ患者がいるといったような偏りは見られない。むしろ、人口は多くても中島家がある北地村から遠い村、例えば長船村や鶴海村、虫明村といった村と近くても人口が少ない村に患者がいないという傾向が見られる。3年間で一番患者数が多い村は上山田村と下山田村で48人、前述の通り、この2つの村は本来、別々にカウントされるべきであるが、帳簿上には一つにまとめられているので患者数が多い。しかし2つに分けたとしても24人ずつで決して少ない数ではない。以下、地元北地村(37人)、山手村(35人)、邑久郷村(33人)、長沼村(31人)と続く。傾向としては地元北地村から見て山北・山南両地区の南方面と東方面に患者の多い村が目につく。

一方で患者の少ない村を見てみると、3年間で患者が1人の村は福里・新地・箕輪・福谷・千手の5か村、3年間で患者が2人の村も7か村あり、患者数が少ない村も多いことが分かる。少ない村の分布としては、邑久郡の東方面の端で北地村からは遠い瀬戸内海に面した尻海村や福谷村など、旧長船地区の数か村、中島家からは近いが北地村の北側の村などである。

全般的に見て、中島家の鍼灸の患者数は、旧長船地区には比較的少なく、中島家から見て南方面の山北地区と山南地区には患者数が多い傾向が見られる。しかし、中島家から比較的近い北方面の村の中に患者数が少ない村もある。邑久郡ほぼ全域からの患者が確認できるが、中島家から遠い村の中には患者がいなかった村もある。

ところで、前掲「邑久郡大手鑑」の中には村の中のいろいろな立場の村民が記載されている。その中に10か村11名(豆田村は2人)の座頭の記載が見られる。彼らの

仕事内容の一つに鍼灸があったと考えられるが、彼らと中島家との患者の重なりはなかったのであろうか。

座頭のいた村の患者数を調べてみると、大ヶ島村(9人:鍼灸の患者数、以下同様)、閏徳村(3人)、下山田村(48人)、山手村(35人)、山田庄村(19人)、豆田村(2人)、虫明村(0人)、福谷村(1人)、尻海村(2人)、小津村(5人)となる。虫明村のように患者がいない村や尻海村・福谷村のように患者数が少ない村がある一方で、下山田村や山手村のように鍼灸の患者数全体でも上位に入るような村にも座頭がいたことがわかる。尻海村や虫明村のように中島家から遠く、座頭のいる村に患者が少ないことは理解できるが、一方で患者が多い村にも座頭がいたということは、村内に座頭がいたとしても、中島家の鍼灸治療を受ける患者がいて、座頭と中島家は患者獲得においてそれほどバッティングしなかったのではないかと考えられる。しかし、鍼灸治療を必要とした患者が、何を基準に中島家か座頭かを選んだかについては不明である。

また、座頭の記載があるのは「邑久郡大手鑑」の中でも大庄屋大ヶ島村義左衛門組合の村々の中だけである。他の3組合の村々には座頭に関する記載が全くない。座頭がいなかったのか、それともただ記載されなかつただけなのかは判明しないが、当時の座頭が広い邑久郡の中でも特定の地域にだけ存在していたとは考えにくい。おそらく、いくつかの村には座頭などの鍼灸を扱う職業者がいて、活動していたと考える方が普通であろう。この郡内における座頭などと中島家がどのような関係で、患者をどのように配分していったかについてはこれからの研究課題といえる。

(4) 中島家の売薬について(表5・図5参照)

現在のように医薬分業がなっていない江戸時代、中島家では薬も製造し販売していた。中島家の売薬の記録は「売薬弘所姓名録」や「売薬処方録」があり、中島家が製造していた薬の種類や処方なども確認できる。その中で販売先が記載されている帳簿が「売薬弘所姓名録」である。これには弘化元年(1844)～弘化三年(1846)の間に地区別に販売した薬名と販売者が記載されている。例えば「辰年預(朱字) 福岡大内屋文蔵 助 沈二 肥二 木二 菊二 目二」などと記されており、文蔵は直接薬をもらった患者というよりは仲買人、あるいは実際に薬を預かって販売する小売業者・販売者と考えられる。また、「肥」などは中島家で製造されていた薬名である¹¹。この名簿が地域別に作成されており、これを見ると中島家がどの地域に薬を販売していたかが判明する。

中島家が薬を販売していた地域を村と照らし合わせてみると43か村となり、回生の患者がいる村数と同数である。患者ではないので一概には比較できないが、リストに記載されている販売者数は174名で配剤や回生より少ない。地区別で見ると、旧長船地区、山北、山南ともに販売者は存在し、回生のように旧長船地区にだけいないと

表5 中島家の売薬の患者数

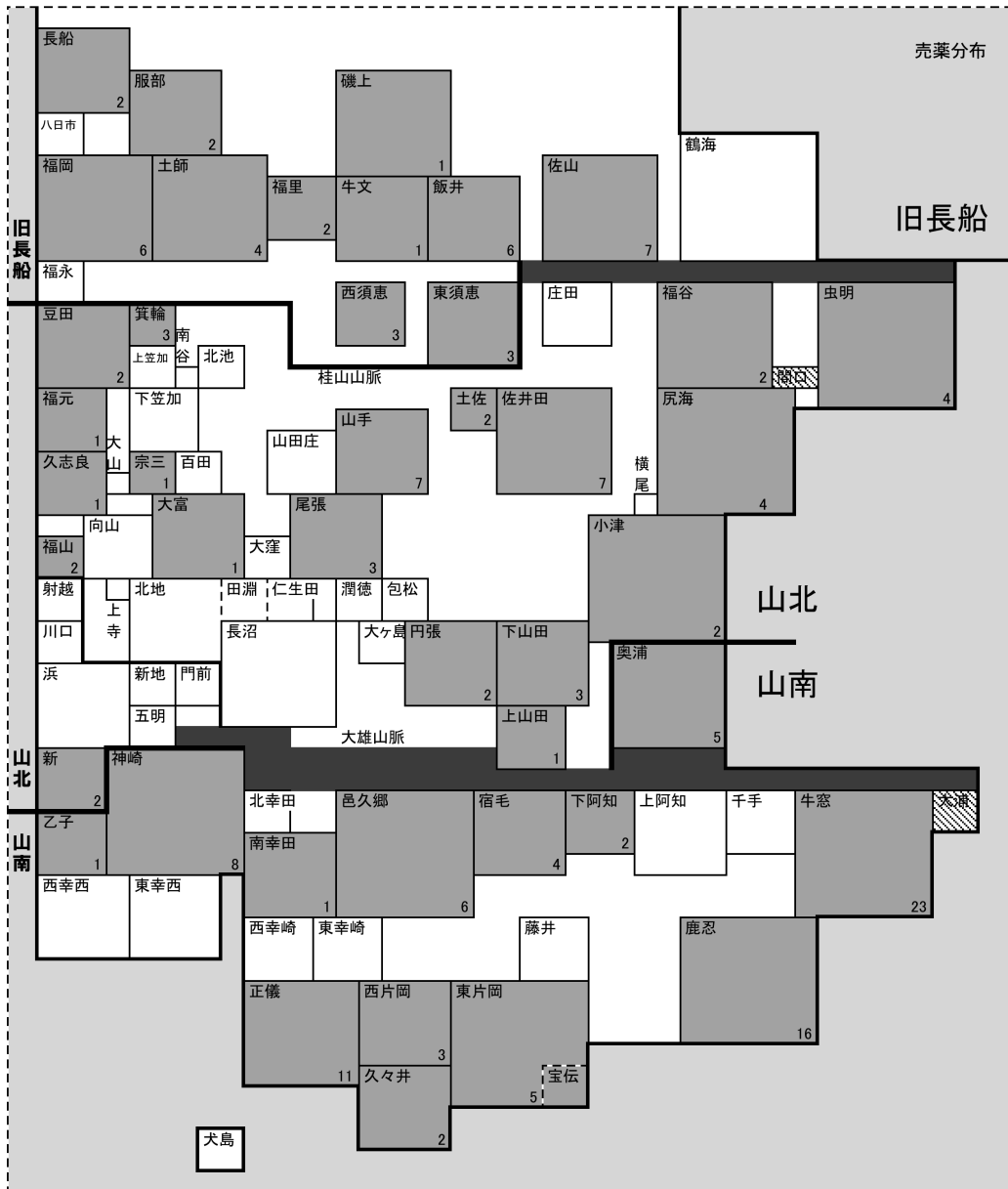
	村名	販売人数(人)
旧長船地区	福永	
	福岡	6
	八日市	
	長船	2
	服部	2
	土師	4
	牛文	1
	福里	2
	磯上	1
	飯井	6
	佐山	7
	鶴海	
	西須恵	3
	東須恵	3
計	11村	37

	村名	販売人数(人)
山北	新村	2
	五明	
	濱	
	川口	
	新地	
	射越	
	上寺	
	門前	
	北地(田淵・仁生田)	
	向山	
	大富	1
	福山	2
	久志良	1
	大山	
	宗三	1
	百田	
	大窪	
	尾張	3
	包松	
	下笠加	
	上笠加	
	南谷	
	箕輪	3
	大ヶ島	
	長沼	
	潤徳	
	円張	2
	下山田	3
	上山田	1
	山手(真徳)	7
	山田庄	
	福元	1
	豆田	2
	北池	
虫明	4	
福谷	2	
間口		
庄田		
尻海(大土井)	4	
小津	2	
横尾		
佐井田	7	
土佐	2	
計	19村	50

	村名	販売人数(人)
山南	乙子	1
	神崎	8
	邑久郷	6
	宿毛	4
	西片岡	3
	正儀	11
	久々井	2
	犬島	
	東片岡	5
	藤井	
	下阿知	2
	上阿知	
	千手	
	鹿忍(平山)	16
牛窓	23	
大浦		
奥浦	5	
東幸崎		
西幸崎		
南幸田	1	
北幸田		
東幸西		
西幸西		
計	13村	87

合計	
43村	174

図5 売薬の顧客がいる村の分布



●…売薬の顧客がいる村(口内は売子の数)

ただし間口村・大浦村は不明

というようなことはない。

しかし、この売薬を行った村数にも大きな特徴が見られる。それは中島家の地元北地村とその近隣の村の記録がないことである。その範囲は、開業地北地村とその枝村田淵・仁生田、さらには近隣の村のうち、包松村など東方面と長沼村など南方面、さらには射越・川口・浜村などの西方面である。近隣を記した別の帳簿があったのかとも推測されるが、北隣の大富村や西方面の新村、さらには尾張村や円張村など近くの村も北地村を囲むように帳簿には記載されており、他の部門の帳簿を見てもそのような分け方をしていないのでそれも考えにくい。とすると、地元や近隣の村は販売者を介せず、直接中島家が販売していたとも考えられる。その場合は、記録が残っていないことになり、今回の43か村という数値に反映することはできない。そのことを考慮しながら見ていきたい。

旧長船地区・山北・山南の3地区にまんべんなく販売しているが、一番販売者が多いのは山南の牛窓村で23人、次いで同じく山南の鹿忍村(16人)、続いて山南の正儀村(11人)となっており、山南の村が上位を占めている。他にも人数が多いのは山南の神崎村(8人)や旧長船地区の佐山村と山北の山手村・佐井田村(7人)などで、これは地区による傾向というよりはむしろ、人口の多い村に販売者が多いということが言える。実際、販売者数の多い村々は、一番小さい山手村でも500人を越える人口を抱えている。とすると、地元と近隣は直接販売していたという仮定のもとに、売薬は配剤や回生と違い、全村とはいかないまでもまんべんなく、大きい村には大勢の、小さい村にも少人数ながら薬の販売者を置いて販売していたと考えられる。弘化年間当時、既に富山売薬は備前国にも入って来て、置き薬の販売を行っており、それに対抗して他の国の置き薬も来ていたことが予想される。また、岡山藩も藩薬を製造し、大庄屋廻しという方法で販売していた¹²。他にも多くの医者や寺社などが家伝薬を販売しており、当時の邑久郡でも薬は身近に手に入るものであった。そういった販売網を利用して、後発の中島家が販売者(小売業者)の販売網を策定することは比較的容易であったと考えられる。その一方で、それら置き薬や藩薬や家伝薬との競争でもあった中島家の薬がどれだけ売れたかについては、「売薬諸事記」には赤字と思われる記録もあるので、あまり売れなかったものと思われる。

3 4部門の医療活動における患者分布の比較

これまでは4部門の医療活動それぞれについて患者のいる村の分布を考察してきたが、ここからは4部門を総合的に比較してみたい。

再度基本的なデータを示すと、前から順に、帳簿の年数・患者がいる年数・患者がいる村数・総患者数で、

配剤 嘉永七年(1854)～明治四年(1871) 17年間 26か村 4,423人

回生 天保五年(1834)～明治三年(1870) 実質31年間 43か村 266人
売薬 弘化元年(1844)～弘化三年(1846) 3年間 43か村 174人
鍼灸 文久三年(1863)～慶応元年(1865) 3年間 65か村 687人

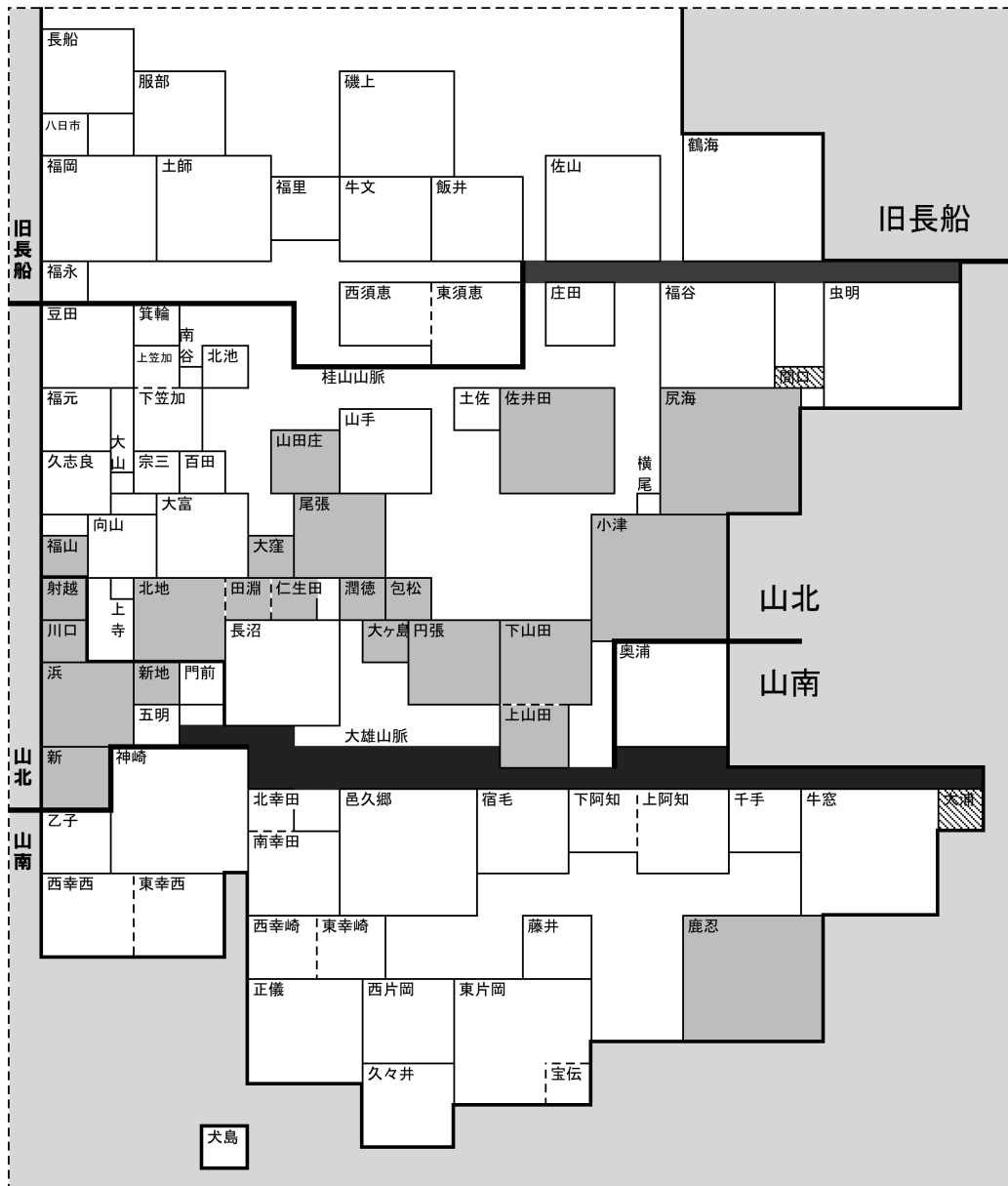
売薬の記録が早い年代のため、4部門の全てが重なる年代はない。売薬以外の3部門は鍼灸の記録の年代(文久三年～慶応元年)がそのまま重なる。残されている記録だけで考えると、中島家は売薬については早々に手をひいて、他の3部門に従事したと考えられるが、実際には帳簿の記録が終わった以降もいくつかの薬については製造していた。売薬については他の3つのような患者ではなく、時代もややずれるので、まず他の3部門を考察していきたい。

3部門共に患者がいる村は、新村・福山村・尾張村・円張村・下山田村・上山田村・尻海村・小津村・佐井田村・鹿忍村・濱村・川口村・新地村・射越村・大窪村・包松村・大ヶ島村・山田庄村・閏徳村・開業地北地村の20か村である(図6・表6)。邑久郡80か村のうち、四分の一を中島家の配剤・回生・鍼灸の3つの医療活動が及んでいた。その範囲は、山南の鹿忍村を除くと全て山北である。医師として山南に診療圏が及ばず患者がいなかった¹³ので山南の配剤の村数は少ない。一方、山北地域の開業地北地村から東方面と西方面に3部門がおよぶ村は集中している。特に東の大窪村や大ヶ島村、包松村などと西の福山村・射越村・川口村などは人口規模がそれほど大きくないにもかかわらず、多くの患者を中島家が診察している。これらの村はおそらく中島家の診療圏で、何かあれば中島家に通院または往診を依頼したものである。実際、これらの村に在村の医師も確認できない。

さらに拡大して、配剤・回生・鍼灸のどれか1部門でも患者がいた村数を調べると、その数は70か村となる(図7)。鍼灸が山南と旧長船地区に患者を持つためその範囲は拡大し、邑久郡内の約88%の村に中島家が何らかの医療活動を行ったことになる。通常の診察である配剤と比べて、異常分娩により急を要する回生術の依頼がどのように中島家に伝わり往診したか、また、比較的容易に利用できる村民に身近な医療であった鍼灸に中島家がどのように関わったかについては精査する必要があるが、それにしても80か村中70か村に中島家が関わった患者がいたということは、中島家が医師として広範囲にネットワークを持ち、ある程度村民から信頼される医療レベルを保ち、地域の医療センター的な機能を持ちながら開業していたのではないかと考えられる。

しかし、これらの医療活動を当時の中島家当主で医門四世の中島友玄が一人で行っていたとは考えられない。回生の帳簿にも息子の玄章をはじめ、幾人かの医師名らしき名前も出てくることから、複数の人物が中島家に関わり、医療活動を分担していたと思われる。現在の中島家に伝承は残されていないが、医学塾を開設し、弟子を育てながら、親族や同僚の医師たちとともに医療活動を行っていたことは容易に想像できる。まさに上寺山の中腹に屋敷を構え、地域の医療に多角的に取り組む江戸時代の総

図6 配剤・回生・鍼灸の部門全てに患者がいる村の分布



● …配剤・回生・鍼灸の3部門全てに患者がいる村(20か村)

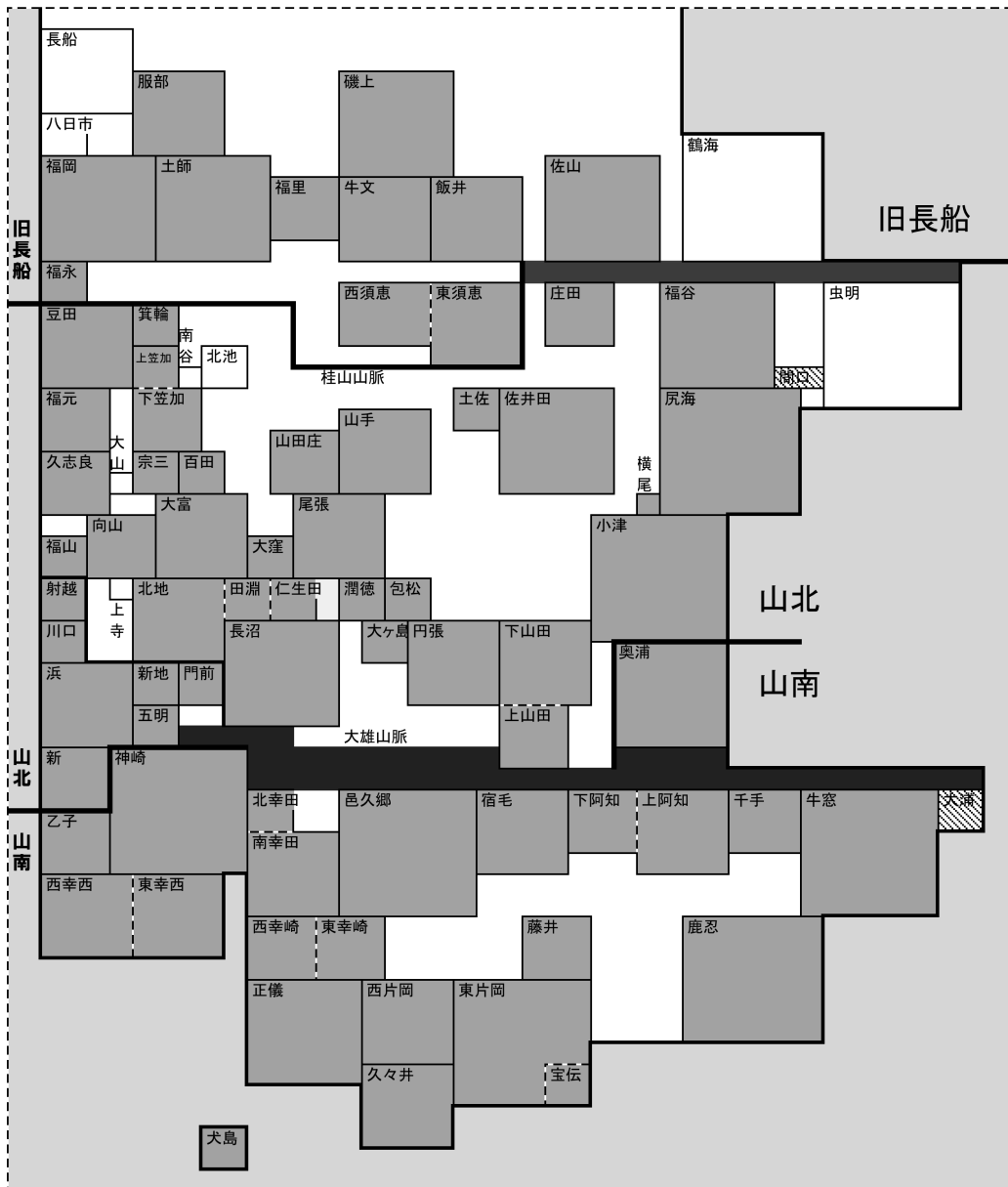
表6 中島家の医療4部門の患者数の比較

	村名	配剤患者数(人)	回生患者数(人)	鍼灸患者数(人)	売薬販売人数(人)
旧 長 船 地 区	福永			4	
	福岡			7	6
	八日市				
	長船				2
	服部			4	2
	土師			8	4
	牛文			2	1
	福里			1	2
	磯上			3	1
	飯井			3	6
	佐山			11	7
	鶴海				
	西須恵	15		4	3
	東須恵				3
	山 北	新村	72	4	7
五明			16	4	
濱		398	8	13	
川口		101	12	4	
新地		77	10	1	
射越		274	11	5	
上寺					
門前			7	14	
北地(田淵・仁生田)		1488	44	37	
向山			15	18	
大富			5	14	1
福山		218	4	2	2
久志良			6	18	1
大山					
宗三				2	1
百田			2	2	
大窪		119	2	6	
尾張		95	1	18	3
包松		90	1	6	
下笠加				16	
上笠加					
南谷					
箕輪				1	3
大ヶ島	404	7	9		
長沼		12	31		

潤徳	50	3	3	
円張	424	7	22	2
下山田	311	2	48	3
上山田		2		1
山手(真徳)	20		35	7
山田庄	22	2	19	
福元			11	1
豆田		3	2	2
北池				
虫明				4
福谷			1	2
間口				
庄田	7		4	
尻海(大土井)	18	1	2	4
小津	32	2	5	2
横尾	3		2	
佐井田	58	1	19	7
土佐	2			2
乙子		18	10	1
神崎		14	30	8
邑久郷		4	33	6
宿毛		1		4
西片岡		12	26	3
正儀		1	5	11
久々井		4		2
犬島	92	2		
東片岡			11	5
藤井			20	
下阿知			18	2
上阿知				
千手		1	1	
鹿忍(平山)	26	2	7	16
牛窓		1	15	23
大浦				
奥浦	7			5
東幸崎			14	
西幸崎		3		
南幸田		2	29	1
北幸田		2		
東幸西		6	20	
西幸西		3		
合計	4423	266	687	174
	26か村	43か村	65か村	43か村

中島家の医療4部門における患者の分布について

図7 配剤か回生か鍼灸のどれかの患者のいる村の分布



● …配剤か回生か鍼灸のどれかの患者がいる村(70か村)

合病院的役割を果たしたと考えられる。

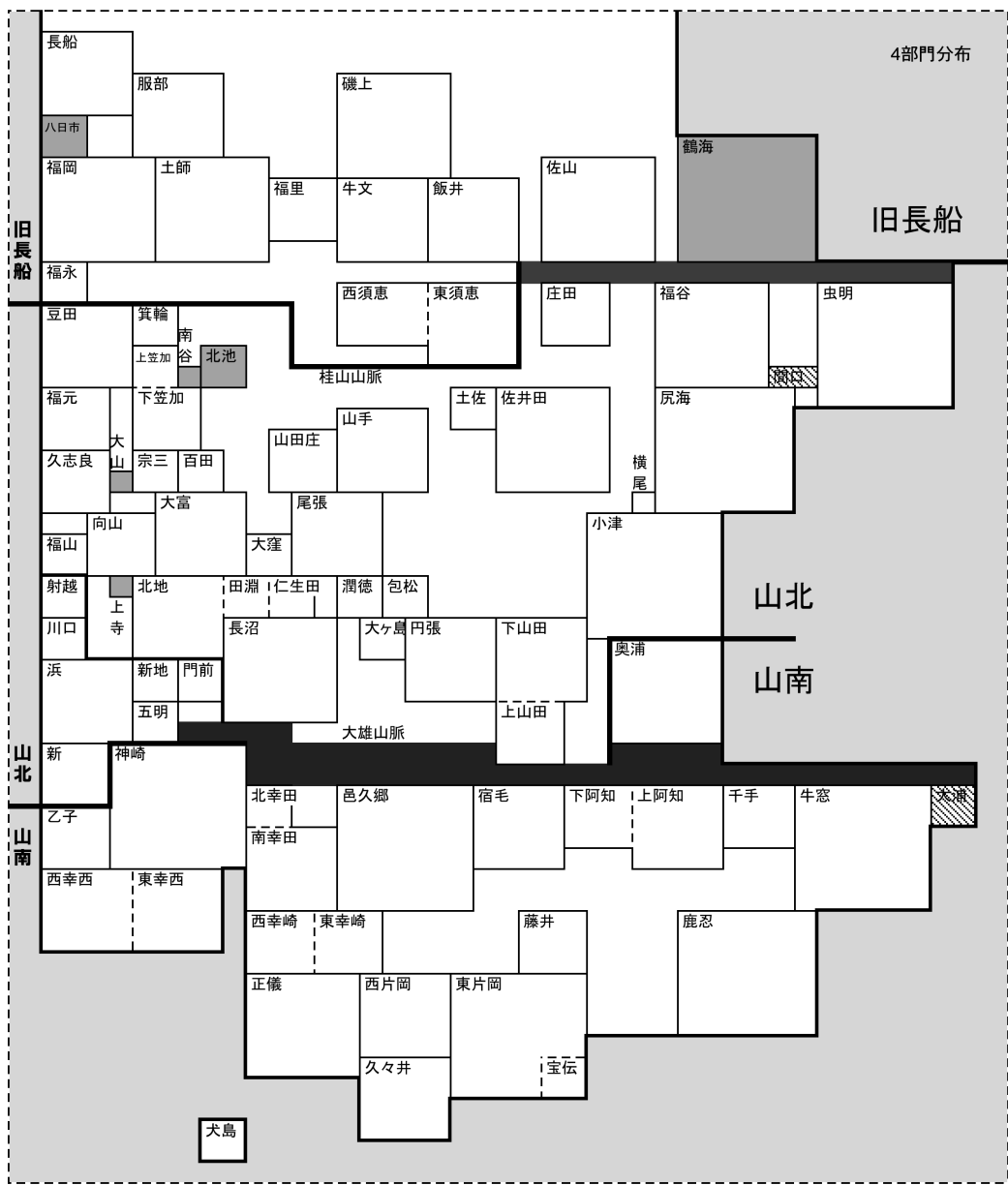
一方で、売薬だけ販売者がいる村は旧長船地区の長船村と山北の虫明村で、この2村を除く8か村がどの部門も患者がいない村となる。それは旧長船地区の八日市村・鶴海村、山北の上寺村・大山村・南谷村・北池村・間口村、そして山南の大浦村の8か村で、そのうち、間口村と大浦村は「邑久郡大手鑑」に人口の記載がなく、人がいなければ患者にはなり得ないので、実質6か村となる。6か村中、八日市と鶴海が旧長船地区で、残りの4か村は山北地区の村である(図8)。比較的中島家とかかわりの薄い旧長船地区の中でも邑久郡の東北端で、非常に遠い鶴海村との交流がなかったことは理解できる。例えば中島家から東方面に非常に遠い虫明村も、売薬の4人を除くと患者がいないということも、ある程度中島家との関わりの中に距離の問題が関係していることの後押しとなるであろう。また、南谷村は人口9人、大山村は56人、上寺村は70人と非常に人口が少なく、そのために患者がいなかったか、あるいは帳簿上、他村に吸収されて記載されていたかも知れない。特に、いかに人口が少ないとはいえ、中島家のある上寺山のすぐ真裏である上寺村に4部門の患者が全くいなかったということは考えにくい。しかし既に述べたように大富村には生田という医師がいたため、上寺村の診療圏はそちらにあり、人口が少ないため全て生田家が医療活動をまかなったということも否定できない。

このことについては、患者が非常に少ない地域が存在することと関係してくる。それは、北地村の北東方面、桂山山脈の麓で旧長船地区と山北の境の辺り、上笠加村・下笠加村を中心とした地域である。データを見てみると、上笠加村・下笠加村が鍼灸で合わせて16人だけ、宗三村や百田村、箕輪村も複数部門に患者はいるが、その数は少ない。北池村に至っては、人口200人を数えるが、4部門共に患者がいない。旧長船地区よりもさらに患者数が少ないこの桂山山脈の南山麓地域と中島家との関わりとは非常に薄い。その理由の一つが既に述べてきたようにそれぞれの在村の医師の存在であろう。大富の医師生田の他に、豆田に医師が1人、福元に医師が複数確認できる¹⁴。これらの医師が、中島家と同様に地域の医療センター的な役割を果たしていたと考えられる。

まとめと課題

他の医師との診療圏の関係で診療こそ手広くはできなかったが、薬を売り、鍼をうち、お産のときに何かあったら駆けつける、そのようにして山北と山南を中心に広範囲に医療活動を行っていた在村医としての中島家の姿が、患者・販売者の分布から見取れる。中島家は後に当時の最先端医療である種痘を取り入れ、山南の村民にも種痘を打つなど、地域の医療に深く関わっていく。こういった中島家の姿が当時の在村医を代表するものなのか、それとも特別な存在であったのかについては、これからの岡山県の医学史・社会史の研究が深まることによって解明されていくものと思われる。

図8 どの部門の患者もない村の分布



…4部門とも患者のいない村(6か村)
 ただし間口村・大浦村は除く

るが、江戸時代後期に邑久郡にこれだけの医療活動に従事した医家があったと言うことは特筆されるべきであろう。

本稿では、中島家の医療活動の4部門について、患者数のデータを中心にその傾向についてまとめてみた。それによって、中島家の幅広い医療活動の様子が明らかになったが、実際の帳簿には患者名や謝金、病名など当時の多くのデータが記載されている。これらを丹念に調査することによって、診療圏とは違った医療活動の中身が見えてくるのではないかと思われる。特に患者名が記載されていることは、医療部門をまたがった比較も可能だが、他の医師の患者名簿などとの照合も可能で、そこから当時の邑久郡内の医療事情をかいま見ることができるのではないかと考える。繰り返しになるが、患者数のデータだけでも多くのことが判明する患者名簿をより詳細に解明することによって、当時の在村医の姿と江戸後期の庶民の医療事情が究明できるのではないかと期待する。

¹ 小林久磨雄『改訂邑久郡史』上巻、邑久郡史刊行会、1953年。

² 邑久町史編纂委員会『邑久町史』史料編(上)別冊、瀬戸内市、2008年。

³ 「邑久郡大手鑑」の記載では惣寄の欄で「(貼紙)一、人数 四万四千四百四拾四人」とあり、実際の人口を合計した人数とは違うが、ここでは各村別の人口を合計したデータを使用する。

⁴ 長船は旧町名でもあるので、旧長船地区と称する。山南が大雄山脈の南側を示すのに対し、厳密には山北がどこまでの地域を指すのかは判明していないが、山北と旧長船地区を区別するために山北を大雄山脈と桂山山脈の間とした。

⁵ いずれも中島家所蔵。以下の資料も全て中島家所蔵。

⁶ 木下浩「中島友玄の患者の診療圏」、中島医家資料館・中島文書研究会編『備前岡山の在村医 中島家の歴史』、思文閣出版、2015年。

⁷ 註6に同じ。

⁸ 板野俊文・田中健二・中島洋一「中島友玄の「回生鈎胞(代)臆」を読む」『医譚』復刊第100号記念誌、日本医史学会関西支部、2014年。

⁹ 鈴木則子「『回生鈎胞代臆』からみた中島友玄の産科医療」、中島医家資料館・中島文書研究会編『備前岡山の在村医 中島家の歴史』、思文閣出版、2015年。

¹⁰ 註9に同じ。

¹¹ 梶谷真司「事業者としての友玄 一製売薬から見た中島家の家業経営一」、中島医家資料館・中島文書研究会編『備前岡山の在村医 中島家の歴史』、思文閣出版、2015年。

¹² 木下浩「岡山藩池田家の藩薬の研究」『岡山県立博物館研究報告』21号、岡山県立博物館、2001年。

¹³ 註6に同じ。

¹⁴ 註2に同じ。

参考文献

中島医家資料館・中島文書研究会編『備前岡山の在村医 中島家の歴史』、思文閣出版、2015年。

中島家所蔵の漢学者関係文書の紹介

—奥村竹亭、日下部鳴鶴、長尾雨山、永阪石埭、西薇山、
山本竟山、山本梅崖、梁啓超ほか—

町 泉寿郎

二松學舎大学 教授

【解説】

本誌前号で筆者は、中島氏七世一太（1870～1928）が学んだ第三高等学校医学部（岡山医学校と第六高等学校をつなぐ時期の組織）の学生名簿を紹介した。中島洋一「中島家の歴史」（『備前岡山の在村医 中島家の歴史』、2015年刊、思文閣出版）に既述されているように、医師としての一太は岡山医学校予科・第三高等学校医学部から愛知医学校に転じてこれを卒業し、軍医となって明治37年に日露戦争に出征し、大正3年からは邑久郡医師会長を長く務めた。この他に、岡山医学校予科への入学以前に西毅一原の原泉学舎に学んで漢学の素養を身につけ、邑久郡の父祖の地で開業してからも茶室清黄亭や園庭を営み、秋佩・徳堂等の雅号を用いて詩文書画を嗜む趣味豊かな人物であった。これを反映して、中島医家資料館には、一太の代に収集されたものと推定される多くの書画や、明治期後半から大正期にかけての漢学者・文人たちの書簡類が伝えられている。今回は、それらの中から主要なものを時系列で翻印して紹介する。

本稿に収録する書簡24通のうち、中島一太宛の書簡は7通、それ以外に黒田幸三郎宛10通、林寛宛2通、阿南竹垞宛・奥村竹亭宛・杉溪言長宛・藤村三介宛・宛先不明各1通である。必ずしも全てが中島一太宛のものではないが、最多の黒田幸三郎の交友圏と中島一太のそれとは重なりが多かったと見られ、その意味でこれらの書簡は中島一太の詩文書画を仲立ちとした人脈や情報を知るうえで有効である。その人脈・情報は概して言えば、山本竟山・奥村竹亭ら京都在住の文人との交流を基盤としたものであり、彼らを通して長尾雨山・内藤湖南らに代表される大正期に新たに形成された京都支那学にも連なるものであった。少年期に学んだ西毅一の他にも、牛窓に隠棲した山本梅崖、京都の文人・学者、名古屋の永阪石埭のような国内だけにとどまらない中国等に対する広い視野・情報を持った人物たちが中島一太の交流圏にあったことは、近代以降の中島家資料を考える上で、欠くことができない視点となると思われる。

以下、書簡の差出人・宛先について、簡単に紹介しておこう（五十音順）。

○阿南竹垞（1864-1928）豊後竹田出身、名衡、通称友彦、長崎の木下逸雲らに学び官吏の傍ら各地で南画を描いた。

○有地品之允（1843-1919）長州藩士出身、海軍中将、男爵、貴族院議員。

- 奥村竹亭（1873-1927）宮崎出身、名直康。書家・篆刻家。東京で英語を修め、中学校・師範学校で教鞭を執り、後に京都で活動。著書『赤壁賦印譜』、松丸東魚編『竹亭印存』。
- 日下部鳴鶴（1838-1922）彦根藩士出身、名東作。太政官に出仕したが、大久保利通死後に致仕。楊守敬らと交わり書家として名を成し、書道教育にも尽力した。
- 黒田幸三郎（?-?) 別号臥龍・浅處、岡山県警察署勤務（警部補）を経て古物商を営んだ。著書『寂巖遺墨集』。
- 杉溪言長（1865-1944）公家山科言繩三男、別号六橋、男爵、貴族院議員。東京専門学校（英語普通科）に学び、また大倉雨村に南画を、森槐南に詩を学んだ。
- 宗星石（1867-1923）対馬藩主家に出生、名重望、伯爵、貴族院議員。亀谷省軒・三島中洲に漢学を学び、大倉雨村に南画を学び、南画界の要職を務めた。
- 田子一民（1881-1963）盛岡出身、東京帝大法科卒業、内務官僚、のち政治家。
- 長尾雨山（1864-1942）讃岐高松出身、名甲、通称楨太郎、東京大学古典講習科漢書課後期卒業、第五高等学校・東京高等師範学校教授を経て、上海・商務印書館に勤務。日中関係悪化により帰国し、1914年以降京都で詩書画と講学の生活を送った。著書『中国書画話』。
- 永阪石埭（1845-1924）名古屋の医家出身、名周二。森春濤・鷺津毅堂に詩文を学び、東京帝大医科に医学を学び、医療の傍ら詩書を能くし、また茶道を好む。晩年帰郷して文墨を専らとした。
- 西薇山（1843-1904）岡山藩士出身、名毅一。明治初期岡山の学校改革や自由民権運動に尽力、衆議院議員を二期務め、閑谷学校の維持存続に挺身した。日中貿易を開拓した白岩龍平は女婿。
- 林寛（?-?) 岡山妹尾出身、別号松蔭。犬飼松窓門、犬養木堂の支持者。
- 藤村三介（?-?) 別号蕉雨。
- 宮崎竹叢（?-?) 岐阜出身、名健、京都の南画として知られた。
- 山本竟山（1863-1934）岐阜出身、名由定、日下部鳴鶴に師事し、渡清して書学を修め、1912年京都に移り書家として名を成した。
- 山本梅崖（1852-1928）土佐出身、名憲。大阪・岡山で新聞記者時代に自由民権運動に関わり、清国漫遊中に多くの名士と交流。のち牛窓に隠棲。
- 梁啓超（1873-1929）清末民国初期のジャーナリスト・政治家。1898年戊戌の政変によって日本亡命、1912年に帰国するまで14年間の亡命生活を送った。

【翻印】

1：日下部鳴鶴書簡 林寛宛 明治三十三年一月二十一日（1900. 1. 21）

（封筒表）京橋區南鍛冶町對山館ニテ／林寛様

（封筒裏）絨 麴町區上六番町 日下部東作 一月廿一日

篆額六字 每字 立八寸 横六寸

碑文 廿一行々四十字 每一字 立一寸八分 横一寸九分

右之字刻違算無之候。但碑ノ上下ノ餘地ハ平均ニ五寸ニテモ可然候。碑下邊之餘地ハ是非五寸ヨリ不少様致し度候。臺石ヨリ雨滴ハネ上ケ候為メ、碑ノ下邊剝蝕イタシ易シ。故ニ下邊餘地多キ方百年之計ニ御座候也。不荘。

一月廿一日 日下部東作 林寛様

昨日ハ御来賁之處、外出中欠敬謝候。其節ハ美葉御恵貽、難有候。鳴謝々々。

2：日下部鳴鶴書簡 林寛宛 明治三十三年四月十一日（1900.4.11）

（封筒）ナシ

本月七日八日兩次貴翰接到、愈御安佳奉賀候。陳は佐藤氏瑩域碑、今回三島翁学士薦叙ニ付、落款中、文学博士ノ四字、并年月及起首三字御改被成度ニ付、可相認様御依頼之趣拝承仕候。右は三島翁へ御照會之上、翁承諾済之儀ニ御座候哉如何。筆者老拙獨断ニ而ハ相認兼候ニ付、三島翁へ御相談之上御申越し被下度候。且老拙去月来、猩紅熱病ニ罹り、追々順快ニハ赴キ候得共、未能離病蓐、今後数旬之末ニ無之テハ執筆不能ヘク、急速之間ニ合イ兼候間、此段御断申上度候。序ナカラ申上候。落款中四字ヲ増加候得ハ、篆額者撰文者及書者之位置甚不宜事ニ相成候。且又元来書者之碑文ヲ書スル位置體裁ヨリ首尾中腹照應变化等、一々考量ヲ費シ、一字不可動ニ至リテ始テ落成致候儀ニ御座候。尤全篇数百字、一氣貫注ニ苦心致候事ニ御座候。然ルニ日月ヲ隔テ数字ヲ改書スルハ実ニ至難之業ニシテ、書者之神情必スシモ前日ノ如キコト不能、文字モ随テ变化ヲ来タシ、第一一氣貫注ヲ傷ケ候為メ、全篇之氣勢ヲ減殺スルコト不少、実ニ不朽之文字、多少ノ苦心ヲ自ラ毀損スル之道理ニテ、書者ニ於テ甚遺憾ヲ感シ候儀ニ御座候。従来俗論之為メケ様ナル目ニ出逢候事多々有之、歎息之至ニ御座候。文学博士之学位ハ結構ニハ相違無之候得共、近来ハ随分澤山出来ニ随イ、如何敷被存候族モ無之トモ難申、三島翁之学徳ニシテ学位之有無敢テ輕重ヲ成スニ不足事ノ様ニモ被存候。不知貴意如何、可成ハ前日拙書之儘御彫刻願ハシク奉存候。臥蓐中、走筆御免し被下度候。頓首。 日下部東作 四月十一日 林寛様

3：西毅一書簡 中島一太宛 明治三十四年六月六日（1901.6.6）

（書簡表）邑久郡今城村／中島一太様

（書簡裏）絨 和氣郡 閑谷／西毅一

拜啓、向暑之候ニ御座候處、益御清祥奉賀候。扱先般ハ山中へ御枉駕被下候處、折悪敷出岡中ニ而不得拝眉、遺憾至極ニ奉存候。其節ハ結構之御菓子御恵贈、且荊妻腫物御診察被下、御厚誼不堪感佩、早速御禮可申上之處、彼是取紛延引相成居申、尚又御製葉御郵送、重々御深情之程難有奉謝候。去月中旬、長崎上海へ罷在候婿、見舞として山中ニ罷越、竟ニ東京へ出療仕居候。直チニ御薬も郵送仕り置候。定而感激可仕候。

右は御厚禮迄如此御座候。草々頓首。 六月六日 西毅一 中島一太様

4：西毅一書簡 藤村三介宛 明治三十五年九月二十四日（1902. 9. 24）

（書簡表）和氣郡和氣／藤村三介様

（書簡裏）絨 和氣郡／閑谷 西毅一

過日は御来遊之處、授業時間中ニ而不得緩話、遺憾ニ奉存候。其後尊大人之御病氣御容體ハ如何ニ被為在候哉。此間内ハ秋雨溟々之處、今日は快晴、御氣分も随而御快く被為在候哉ト奉存候。扱御来訪之節ハ見事之六々鱗香魚、其他種々結構之御品々御恵投、御厚情感謝之至ニ不堪候。紅黄蕪菁ハ向後直ニ蒔付申候。別紙近作入御覽候。閑防印ハ例之杉子爵聴雨翁寄贈之臣心如水之四字ニ候。此四字ハ迂生一生之心事也。翁とハいまだ一面識も無之候得共、所謂心識と可申歟。翁寄贈の、

盡静猊爐吐篆煙 安心身自出塵縁 滿城車馬喧闐裏 獨聽梧桐殘雨眠

是れ翁之心事を漏されたるものと存候。右四字之贈ハ山人ニありてハ三公ニ拝したより喜敷御座候。春初、金井金洞翁より、

閑居閑谷未全間 且喜煙嵐隔市寰 二百餘年文教盛 蕃山以後即薇山

關西人仰此宗師 曾訪山居見講帷 三岳莊中懸榻久 東遊千里果何時

小野湖山翁よりハ、

老椿花外百花春 想見故規加一新 閑谷覺中閑日月 天留此境付斯人

湖山ハ九十、金洞ハ七十、聴雨翁ハ六十九なりと。此三老より過獎如此、汗顔之至ニ御座候。全く芳烈公之御蔭ニ栖息いたし候故ト、益感激仕候。御委嘱之尊大人還曆壽序ハ今少し延引仕候。高作数篇感吟罷在候。右ハ過日御来訪之御禮旁如此ニ御座候。草々頓首。 九月廿四日 毅一 蕉雨老契

尚々、石野生へ被托うるか澤山御恵投、日々晩酌之好下物といたし居候。是又御禮申上候。

5：西毅一書簡 中島一太宛 明治三十六年十一月六日（1903. 11. 6）

（書簡表）邑久郡北島村／中島一太殿

（書簡裏）絨 閑谷／西毅一

拝啓、去月十九日、皇太子殿下閑谷覺行啓被為在、講堂ニ於テ拝謁、種々御下問ニ應シ奉答候處、御満足ニ被思召、御旅館後楽園ニ被召、御酒肴料并ニ御端物之恩賜アリ、且岡山驛御發車ニ臨ミ特ニ池田侯爵ヲ御車中ニ被召、閑谷覺ハ名覺ナリ、永久保存セザル可カラズ、此旨覺長ニ傳フベシトノ畏キ御詫アリタリ。嗚呼十八年聖上御巡幸之際ニハ特使臨覺、廿七年殿下廣島大本營ヨリ還啓之節ハ和氣驛ニ於テ拝謁被仰付、今又此殊恩ヲ蒙り候段、本覺無上之光榮、感泣之外無之候。右御報迄如此御座候也。

十一月六日 西毅一 中島一太殿

6：西毅一書簡 中島一太宛 明治三十六年十一月二十五日（1903. 11. 25）

（書簡表）邑久郡北島／中島一太様

（書簡裏）絨 和氣郡 閑谷／西毅一

拝啓、益御清福奉恭賀候。陳ハ小生驚齡、今茲癸卯華甲之壽域ニ躋リ候處、祝賀之紀念として閑谷之邃山秀、古松老杉之下ニ結構なる書齋一棟御建築被下、御厚誼ハ山光水色と共に永世不朽、感謝之至ニ御座候。別封拙筆二葉、内祝代餅拝呈仕度、御笑留被下度、右は御禮如此ニ御座候。頓首。 十一月廿五日 西毅一 中島一太様
別啓

昨日は御来駕被下、何之風情も無之、失敬相極、御海怨是祈候。其節ハ鮮鱗御携帯、難有拝領、晩酌之好下物として拝味賞玩仕候。御歸去後、大黒陸軍大尉来訪一泊、応對之際、別紙拙文相綴り、一応入御覽候。翁之思召ニ相叶哉如何。追而推敲浄録、さし上可申候。以上。 廿五日 毅一 中島老兄

7：田子一民書簡 黒田幸三郎宛 明治四十五年一月五日（1912. 1. 5）

（封筒表）岡山市岡山警察署／黒田幸三郎／必親展

（封筒裏）絨 山口都濃郡役所／田子一民／一月六日

拝呈、立春之候、春水自ら和き心地よく存候。過日南海之一巻御送附被下、有り難く拝受仕候。如何なる人か未明に候へとも、面白く覚え候。早速御返事申べき之處、当時縣より小田切内務部長一行、郡役所その他の事務監督として来徳中にて、昼夜御伴なり御相手なりにて日々閑を得ず、覚えつゝ失礼仕候。本日午前十一時兼而御帰り相成申候。右御禮旁々御答迄拝具。 一月五日 一民 黒田老臺
別条御査収願入候。

8：有地品之允書簡 杉溪言長宛 明治四十五年四月十五日（1912. 4. 15）

（封筒表）麻布区新龍土町一二／男爵杉溪言長殿 親展

（封筒裏）ㄨ 神田淡路町／有地品之允

拝啓、過日電話ヲ以テ豫メ相伺置候様、来ル十七日午後四時ヨリ御光来被成候ハ、仕合申候。一二尊覽相願度物有之、入江子爵迄申試候處、旅行不在之由、津田男江申入置候。餘ハ拝鳳可申上候。敬具。 四月十五日 有地品之允 杉溪男閣下

9：奥村竹亭書簡 黒田幸三郎宛 大正三年十一月八日（1914. 11. 8）

（封筒表）岡山市上之町人見氏方／黒田幸三郎様 惠展

（封筒裏）封 五香家 奥邨直康

拝啓、過日は無遠慮ニ参上致候處、極めて御懇篤なる御待遇を蒙り、萬謝之至ニ奉存候。此段厚ク御禮申上候。銘幅珍器段々ニ拝見、興趣無涯大慶致候。御高属之篆書扁字ハ拝揮之上、来ル十六日出岡之節、持参可致候。御了承可被下候。

於錦地小弟の為ニ書會を開かんと段々先輩諸氏御尽力被下居候、光榮之事ニ存居候。何卒充分御聲援ヲ賜はり度奉願上候。何れ参上、篤と御禮も申上、且つは萬々御願も申上度と存候へども、先は書中御挨拶旁如此御座候。草々。

十一月初八 直康頓首 黒田様研北

10 : 宮崎竹叢書簡 中島秋佩宛 大正三年十一月二十三日 (1914. 11. 23)

(封筒表) 備前国邑久郡今城村北島 / 中島秋佩先生 升啓

(封筒裏) 〆 「京都麴屋 / 町六角上 / 宮崎竹叢」

拝啓、小弟尊地滞留中ハ不一方御配意ヲ蒙り、尚御別ニ際シテ非常ノ御待遇ヲ忝シ、千萬奉謝候。小弟廿一日無恙帰洛仕り、尚年内ハ家居罷在候間、此ノ紅葉ノ好期、文展御一覽旁高立先生等ト御来遊被仰、移榻相待居申候。右御礼旁御依頼迄草々頓首。宮健 十一月念三 秋佩先生梧下

11 : 星石 (宗重望) 書簡 阿南竹垞宛 大正四年四月九日 (1915. 4. 9)

(封筒表) 本郷区湯島天神町一ノ四十 / 阿南竹垞殿 揮毫在中

(封筒裏) 緘 大森新井宿 / 星石道人

拝啓、過日御預之小卷梅花圖、及御郵送候。宜敷御加筆被下度。十三日は午前十一時頃参上可致、澹如モ御呼寄置如何。同處ニ而御合遊致度存候。右草々申述候。頓首。四月九日 星石 竹垞雅契

12 : 奥村竹亭書簡 黒田幸三郎宛 大正四年六月六日 (1915. 6. 6)

(封筒表) 岡山市野田屋町五一 / 黒田幸三郎様 親展

(封筒裏) 封 六月初六日 「京都御幸 / 町押小路 / 奥邨竹亭」

惠箋忝拝誦、令息御病氣にて一時大心配被成候由之處、早々御全快、先以て大慶致候。尚折角御大切ニ可被遊候。王翁石画御氣ニ入候よし、重疊致候。至而好人物ニ候へども、氣のフラハ、と變る人ニテ、又極めて神経質也。将来御交際上、屹度御氣を附ケ可被成候。小生過去滿五ヶ年間朝夕の交際実以て尋常一様の事にては候はず、随分氣を使ひ申候。老兄御参考の為ニ披瀝致候。御多言御無用の事ニ御座候。

内藤博士へは未だ伺はず候へども、追々御懇意ニ願候筈ニ御座候。御申越之件、屹度請合申候。暫ク御猶豫可被下候。大字は不妙、先づ五八分以内可然と存候。

当地古本屋多々有之、珍本も不尠候。入らぬ買物をいたし飛んだ散財致候事間々御座候。チト引キシマラネバどもならぬと存居候事ニ御座候也。

于時年来搜索いたし居候篆刻家の寶典「集古印存」といふ、壺部ニテ二百二十円といふもの、支那がへりの人売たしといふものあり、略ぼ買受の契約いたした處、さて用意ニ不足致候處、補足の為め例の絶品の寂巖書幅此際處分致度、尤も此幅の事は兼テ岸氏よりも特ニ御話有之たるを以て、一昨日一應同氏迄通報は致置候へども、同氏も

事業佐蹉跌等昨今如何なる景勢には当テニ不相成事と存候。明日あたりには何分の返事有之べきか、兎角大森氏も所望との噂も聞及居候ニ付、御尋一度当つて見て下され度、併シ売値は朱珍牙軸矢籠箱ニ仕立有之、先づ三十五円より四十円迄との希望ニ御座候。書ハ左程傑作といふニ非ズ候へども、昏中の奇麗なものと幅格恰宜しきが天下の絶品ニ御座候。寂巖筆跡は当地具眼の士皆驚居候事ニ候へども、入洛早々品物など売出し候ては早束手許を見られ候事ニテ、当分当地ニテ売出し絶対ニ禁物ニ御座候事情、御諒承何卒宜敷御世話被下度奉願上候。

御来示原田寛治とは記憶ニ無之候へども、遇ふて見れば分りも可致候。何分色々の人ニ接シ候為め、名前など知らざる人多ク、本人を見ねば不分ぬ事間々御座候。御一咲可被下候。

風呂敷は又何かの便可有之、其迄御留置被下度候。西田旅館へ書をヤル約束アリ、近日一揮と存居候。御序も候節は、左程御傳言可被下候。草々。

六月初六 直康頓首 黒田盟兄研北
尚々

13 : 奥村竹亭書簡 黒田幸三郎宛 大正四年十一月十五日 (1915. 11. 15)

(封筒表) 岡山市野田屋町五一 / 黒田幸三郎様 親展

(封筒裏) 十一月十五日 「京都御幸 / 町押小路 / 奥邨竹亭」

御細書拝見、毎度御懇切ニ思召被下、感銘之至ニ不堪候。前便書洩シの事有之、一應得貴意置候。宮崎竹叢といふ人は岐阜縣の人、四年以前初めて面晤、一見如舊知意気大ニ相投ジ居り、小弟京都移居之事等、専ら同氏の御世話相受ケ居候事にて、種々の関係上、鋳老に比し又特別の情誼も有之、自然相互の往来も繁く相成居候事ニテ、其関係を知れる鋳老が王翁ニ向て自分を疎外するなど、の不平を洩らすは婦人小児の當サニ然るべき所也。一咲の値だも無之事ニテ、書道篆刻小技ナカモ将来ニも偉大なる抱負を以て斯道ニ進みつゝ、一男子斯る事ニ氣苦勞など致候事は真平ニ存居候。小弟は前便申上候通り鋳老ニ對して或る敬意を表し、其ニ係ラズ種々のヒガミよりして小弟を疎外する様相成候ても、敢て悲くも無之覚悟ニ御座候。鋳老との関係に就ては決して寸毫も何等御心配被下間敷様願上置候。尚当地ニ於ケル諸文人訪問の件は、無論精々相勤め可申候。されば連印の仕事などは三軒ニ一軒もアルモノニ無之ものニ御座候。

御高命湖南先生筆勞の事は、小弟よりも却而山田貞芳氏の手を経て願はれ候方尤も妙と奉存候。何分先生は得意として詩を作られ不申、画賛など調子よく承諾せらるゝや否や、充分の保証出来不申候。小弟先年、海屋の銘帖(千二百円)の跋を願たる事有之て其さへも遂ニ出来ズ仕舞ニ相成候事御座候。御参考迄ニ申上候。

煎茶の本承知致候。必ず御送可申上、暫ク御待ち被下度候。岡上為右衛門御大典紀念品頒布会とかいふ店を出シ備前焼を澤山ニ店頭へ列べ居候。半丁程の處ニ有之、度々

面会致候。同人も妙な商売を始めたものニ御座候。甘く行けば結構ニ御座候。店の者二人と飯たきバーさん一人使用致居、寺町二条十四ニ御座候。岡山の方はスツパリやりつけでも致たるものにや。少年兄の事一々承申候。中山の方宜敷かるべく候。以上。十一月十五日 直康頓首 黒田盟兄研北 尚々

14 : 山本竟山書簡 奥邨竹亭宛 大正五年三月二十五日 (1916. 3. 25)

(封筒表) 岡山市野田屋町等覚院内 / 奥邨竹亭先生 / 三月廿五日

(封筒裏) 「鳳 / 鳴」 山本緘 「京都室 / 町下長 / 者町上」

貴墨拝誦、筆研益御清福奉賀候。然るに老和尚長卷所分延引ハ拙者多忙の為ニツイ遅延仕候。該卷如貴説頗妙品所罕見也。敝齋へ御譲願度候得共、所蔵卷与時代結字運筆等同一ニ付、貧生ニは同じ物ニ卷は贅沢、不得已佗へ勧め申候。西京に在れハ時々獲觀も出来申候ニ付、只今引受者取極申候。然るに款識も無之ニ付、料金幾分扣折出来間敷哉。欠合方倚頼せられ候ニ付、乍御手数求售者ニ御交渉煩度奉願上候。仍而切手御返上申候。阿竹ハ凡物如名鑑、甚問題は其人ニ而考の異なるものニ候得共、可惜と存候。支那ニ於而も字画を賣など云事は……まれ候。マシテ本邦に於テヲヤニ候。餘は拝顔之上、草々敬復。 奥竹亭先生侍右 由定頓首 三月廿五日

15 : 奥村竹亭書簡 黒田幸三郎宛 大正五年五月二十一日 (1916. 5. 21)

(封筒表) 岡山市野田屋町五一 / 黒田幸三郎様 拝覆

(封筒裏) 封 五月廿一日 奥邨直康「京都御幸 / 町押小路 / 奥邨竹亭」

貴牋接到、愈御清穆被成御起居、珍重奉存候。弊廬一同無事、乍憚御安慮可被下候。近日入札御催のよし、充分の御景氣希望致居候。竟山は支那癖にて、時々揮毫などの謝禮は支那にては前納が禮式也などの咄有之、「粗末ナガラ進上、友人の手製也。画賛にても頂き度と」露骨ニ出で候方却而妙と存じ、前便得貴意置候次第ニ御座候。昨日煮硯箋半截持参、之レニ石を願ひたし、明日取りに参るから宜敷く頼むと申置候。定而咲而其れは草書を書くより六ヶシ、併シヤツテ見マセウと承諾シ候。出来候ハハ、老兄ニ進上可致候。誰の依頼かと申候間、自分の也と答て置候。為メ書キニセネバヨイガと存居候。○南山翁も半截と例の絹本小切一枚、今明日中出来候筈ニ候。之レハ岡山友人の依頼也とて菓子折進上致し、快諾也。○湖南先生の分は暫時御猶豫被下度、定而湖南先生とは竟山・雨山の其れの如く別懇といふ譯に無之候へども、近日小弟帖の題字を願ひ度事有之、昨今帖製作中ニ有之、其れと同時ニ願出候考へニ御座候。今一度御諒承可被下候。湖南先生は又印を一組(十五面)頼み度と申居候ものゝよし、其知人の咄ニ御座候。自然懇意ニ相成可申候。一六翁の書額御申越被下、奉謝候。昨今貧乏甚敷、迎も何等の好氣無之、乍遺憾今回は見合せと致候。

小塩君の印近々刻了、送達可致候。宜敷願上候。尚御序多田氏名刺判の料金も宜敷奉願上候。玄洞のは拙も物ニ相成間敷シ、併シ印材は他人のものニ而、責めて其代りダケにてもと存居候。如何。重々の御配慮を煩はし、辞一謝すべきナシ。何事も不悪御海容可被下候。

当地移居、早や一年を越シ申候。餘り適ぎも不致候へども、ボツ、懇意の先キも出来、又小弟の性質も略相分り候よし。元來京都向きには無之候よし、併シ適ニ生れがはり候譯にも不参、此分致し方無之候也。併シ最後の勝利は定カ也。書と篆刻に於ては所詮小弟のものニ相成可申、緩々と御見物可被下候。阪田・荒木両先生不絶御懇情、乍何時感泣無涯候。御序何卒小弟の感謝御傳言可被下候。草々。 五月 卅日 直康頓首 黒田盟兄研北 尚々

16：永坂周二書簡 黒田幸三郎宛 大正五年十一月三十日（1916. 11. 30）

（封筒表）岡山市野田屋町五一／黒田幸三郎様 親展

（封筒裏）名古屋上長者町三ノ十二／永坂周二

御手数ヲ懸ケ奉り候。饅頭皿已ニ到来、早速他へ贈呈仕候。誠ニ評判宜候間、相喜申候。荷造り萬端実ニ御厄介之至ニ奉存候。猶又々願出候義も可有之、何卒宜布御配意被下度候。何カ御礼モ可申上候處、実ハ歸後足痛ヤラ又不在中へ雅俗両用モ可也ニ糾纏致候ノミナラズ、來客ハ実ニ麿到、為メニ荒木・阪田両先生へも御無音と相成り、心頭ニ懸り、今夕ハ此筆墨ノ序ニ一書相認メ可申候。片岡氏ノ件ハ実ニ申譯無之次第ニハ御座候得共、何分御存之通り足痛ノミナラズ身體モ幾分ノ疲労モ有之候處へ、遠方へ船車ニテ参り、先キニテモ萬一作詩揮毫杯ト云フコトニ相成候テハ、トテモ老體耐忍出来兼候間、終ニ謝絶否ナ辞退仕候次第御座候。貴示ノ如ク何カ一首作り御詫可申敷、又ハ舊作ニテモ相認メ、追テ参岡ノ時節モ有之候ハ、其節ハ第一訪問可致ト存候。萬々御賢察被下度候。老人今日ノ状態ニテハ何時間地ニ就キ可申哉、東京引拂ヒ候主意ハ全クな事省略ノ處、只今ノ実況ニテハ却テ多事ニ相成、後悔致し居候。コレモ老人ノ愚痴御一咲可被下候。矢掛ノ分ト紅峰先生聯、其外ハヤツト今日午前ニ片付ケ候得共、玉邨氏ノ硯ノ蓋ト忘雲先生ノ画冊ノ題首ハ明日ニ相成可申、何レニシテモ同封ニ拝送ハ出来兼候間、明朝兎も角モ続紙ノ一卷ハ一纏メニ差出し可申候。其後ノ別口ハ兩三日ニ拝送ノ積リニ御座候。○御送り被下荷物、石井ニ花籠、其外ニサヤ三個有之、コレハ三輪ノ御約束ノモノ、如ク申居候得共、其内ノ角形ノモノハ小生へ頂戴致度、此代價ハ何程ニ御座候哉、御聞セ被下度候。実ハ友人へ譲リ度候間、右相伺置度候。先ハ右御礼迄草々頓首。

十一月卅日午後八時 周 臥龍先生侍史

此書状書き終り候處へ又々來客有之候へハ、嘯が長ク相成候ハ、両先生へノ文通ハ明日に相成可申、筒井五百珠先生へハ明日一書可呈、吟社諸君ノ内ニモ岡西・松岡へ

ハ矢張り明日可申候。

17：永坂周二書簡 黒田幸三郎宛 大正五年十二月十三日（1916. 12. 13）

（封筒表）岡山市野田屋町／黒田幸三郎様 呈惠親展

（封筒裏）メ 名古屋上長者町三丁目十二／永坂周二

昨日ハ封書葉書二通拝受拝読候。兎角御配意ノミ恐縮ニ御座候。扱脱巖ハ何分宜布、仰之通りナレバ至極相当ト奉存候。表具ニハ多少ノ手間賃ヲ取ラレ候事ト奉存候。サヤノ類ハ何卒御送与奉願候。運賃ハ如何。昨日漸ク到達致候敷瓦ト壺ハ、折込ミノミ持帰り候由、然ルトキハ此運賃ハ貴所ニテ御立替被成候モノト奉存候。○槐南ノ詩箋ハ一枚、外ニ拙作ニ評ヲ書き候草稿一枚、後刻ノ便りに呈上可仕候。コレハ日来ノ御厚意ニ酬ユルモノニ御座候間、別ニ御返礼等ハ必ず御無用ニ願上候。小生よりハ無御遠慮萬事願出可申候間、買物一切ハ何卒代價御取被下度、「サヤ」モ亦然り。餘在後信。頓首。 十二月十三日朝

壺ハ花瓶ニ致候ツモリ、竹ノ筒ヲ入レ申候。頗妙品ナリ。

サヤハ御示被下候品ハ何卒至急願度、実ハ友人共頻りに渴望致候間、進物ニ致度候。

○看雲先生ヘノ槐南尺牘ハ已ニ送り置申候。 周 臥龍先生侍史

臥龍ノ外ニ御別號ハ無之候哉、御聞セ可被下候。龍ハ餘り威張り過ぎ、ヤサシキ一號ガホシイ。只今油昏包ミ二個到達、未開緘候。

18：山本梅崖書簡 中島一太宛 大正五年十二月十八日（1916. 12. 18）

（封筒表）邑久郡上寺山下／中嶋一太様

（封筒裏）緘 封／「備前牛窓／山本憲」

静處之詩出来候故、風月堂ニ廻シ置申候。絹手許ヨリ取替差出候。豫備トシテ二枚差出置候處、不用ト相成、又ハシタニ相成ニ付、拙揮シテ献上候。御一笑祈候。草々。十八日 憲 中島様侍史

19：長尾雨山書簡 黒田幸三郎宛 大正六年八月十日（1917. 8. 10）

（封筒表）岡山市野田屋町／黒田幸三郎様

（封筒裏）メ 「京都市／室町通／出水上／長尾甲」

拝読致候。如高論炎暑難凌候處、益御清勝奉賀候。先般相認差出候金扇、文字脱漏有之候趣、輕卒之至奉恐縮候。別紙ニ加書致候間、御覽被下度候。此詩ハ李太白之名作ニ而、何人も存知候もの故、別段補寫不致候而もよろしからんと存候。脱字之儘致置候事ハ古人ニも其例多く有之候故、御承知被下度候。尚別便ニ而竹石図一幅絹小片一幅差出候。御青収被下度候。養氣之為め甚延引、御海容願上候。不一。 八月十日 甲頓首 黒田雅契

牛渚西江夜 青天無片雲 登舟望秋月 空憶謝將軍

余亦能高論 斯人不可聞 明朝挂帆去 楓葉落紛紛
 清景南樓夜 風流在武昌 庾公愛秋月 乘興坐胡牀
 龍笛吹寒水 天河落曉霜 我心還不淺 懷古醉餘觴

20 : 奥村竹亭書簡 中島一太宛 大正七年一月六日 (1918. 1. 6)

(封筒表) 岡山縣邑久郡今城村 / 中島一太様 拝覆

(封筒裏) 封 一月初六朝 「京都御幸 / 町押小路 / 奥邨直康」

恭賀新禧、新年御懇篤ニ御尋ね被下奉謝上候。時下嚴寒愈御佳適、珍重奉存候。先般当地御滞在中は、度々御過訪被下、且又結構なる御品澤山ニ御投寄奉深謝候。雨山翁へも早速相届ケ申候處、大ニ喜はれ序宣布と申出られ候。御承知可被下候。一向ニ当地より好便の見込も無之、御あづかりの品々近日丁重ニ荷作致シ小包便にて發送可致候。硯は福建省の杭州又はハ元州邊にて出づるものにて、普通端溪石と稱ものゝよし也。併し本当の端石には無之よし、雨山翁の話ニ御座候也。愚妻の事御尋ね被下、奉謝上候。其後全快、極めて壯健ニ致居候。御安慮可被下候。本人よりも宜敷御禮可申上候様申出候。実は御帰朝早々御手昏も差上ケ且ハ新年にも早速賀状と存居候へども、御名刺を逸シ御住所忘却の為、乍存何事も遅緩ニ及申譯無之候。不悪御諒察可被下候。時下嚴寒、折角御自重專要奉存候。草々。 一月初六 直養頓首 中島先生研北

21 : 奥村竹亭書簡 中島一太宛 大正七年一月二十四日 (1918. 1. 24)

(封筒表) 岡山縣邑久郡今城村字北島 / 中島一太様 拝覆

(封筒裏) 封 正月念四認 「京都御幸 / 町押小路 / 奥邨直康」

長尾先生へ鑑定料云等の事は別ニ御心配御無用にて宜敷かるべく候。大西洞水君申は追而承り、御一報可致候也。

拝啓、兼而御あづかり申候品及ヒ拙刻、本日小包附郵致候。貴到御檢収可被下候。印は印材共ニて壱円五拾錢頂き可申候。研屏の銘は石鼓文其儘のものニ有之、應用致候事ニ御座候。 鱖鯉處之、君子漁之にて丁度格恰の句と存居候也。此刻料など小生領分のものニ無之候間、ヨイ加減の處にて宜敷候。草々。 一月念四 直康頓首 秋佩先生研北

22 : 永坂周二書簡 黒田幸三郎宛 大正七年十二月十七日 (1918. 12. 17)

(封筒表) 岡山市野田屋町 / 黒田幸三郎様 文雅用

(封筒裏) 十二月十七日 「名古屋市西區 / 上長者町三丁目 / 永阪石塚」

此書状ハ十六日ノ貴書ヲ得候後ニ相認メ候得共、小包ハ未着ニ御座候。月瀬歸後、多少疲労相見候哉、家族其他ノ人ヨリモ暫時撰養可然忠告ヲ受ケ、兩三日筆硯休止ト云フコトニ致候間、遂ニ高属ノ分モ落款斗リニテ拝送得ズ、漸ク先刻相送

候間、御查收被下度。潤筆ノ残り又々送被下、難有奉深謝候。兎角御手数ノミ相懸り、恐縮ニ御座候。槐南詩箋ノ外、横モノ一枚呈上仕候。是ハ一寸面白キモノト存じ候。槐南が今日ノ聲價ヲ得ザル前ニ篋底ニ保存候珍品ナレバ、何卒貴会ノ下ニ御留メ置被下度候。先ハ匆々右迄、書外在後信、頓首。

十二月十七日 周 浅處先生侍史

御奮發御出懸ケ被下旨、大ニ喜御待申上候。寒氣甚敷トハ申ナガラ、車中ハ温暖ニ御座候。併し御令息様ハ随分御愛護御旅行相成度候。小生ノ近場ニモ旅宿ハ沢山御座候得共、一寸相考候處、夜中又ハ早晨ニ御着ノ時ハ萬一拝迎之失敬之事有之候テハ不宜ト存候間、寧ロ停車場近邊が御便利ナラント云フ説モ有之候間、名古屋驛ノ極々接近、志那[○]忠[○]支[○]店、右ハ直クニ相分り可申、無論小生より御来着ノ日御通知ヲ得候ハ、速カニ申遣置候間、御安心被下度候。コレハ小生方へ訪問ヲ得候人ハ大抵此旅館ニ御座候。前以テ申上候通り、拙宅ニ御泊リノ思召ニテ願上候。一切小生ヨリ支弁可仕候間、決シテ御配慮無之様ニ願度候。是ハ失礼ニ似タレトモ、鄙意御採用願上候。

○幅ノ類ハ未拝見不仕候得共、真跡ナレバ御譲り願度候。雁ノ香合トノンコー黒茶碗御携帯被下候事ト存候。釜ハ是非願度候間、御忘れ無之御荷物ト共ニ重キモノナレバ御注意奉願候。

○兼々御申越ノ染付茶碗ハ小生ノ手元ハ極新製ノモノ有之候間、御一覽可被下候。御急キニ御入用ナレバ之ヲ御譲り可申上候。花瓶等ハ何卒大略ノ寸法御聞セ置被下度候。窯元へ申遣候得共、此年末如何ト存候。出来ルコトハ必出来可申候。今日ハ朝カラ揮毫大勉強、此書状モヤツト認メ候位御座候。御察可被下候。

(別紙)

尋常ノ詩箋ハ猶有之候得共、此種竹山人ト唱和ノ内ノ一首ハ頗ル得意ノ様子ニテ、別ニ書状モ無之、封筒ニ入れ郵寄致候モノニ御座候。仍テ封筒共ニ呈上仕候。他ノ一箋ハ鎖リノ代りニ先ツ令夫人へ差上申候。十七日朝 周 浅處賢臺侍史

(森槐南封筒)

神田區松枝町二十三番地／永阪石埭先生 升 「(消印) 35.8.31」

永田町一丁目十九番地 森泰二郎

23 : 阿南竹垞書簡 黒田幸三郎宛 某年二月二十五日 (? . 2. 25)

(封筒表) 岡山市野田屋町五一／黒田幸三郎様 親剪

(封筒裏) 都窪郡酒津／阿南竹垞／二月念五日

御念書忝拝誦、彼ノ一条ニ付テハ種々御配慮難有奉存候。御来示ノ数項、当方ニ於テハ未タ左右致候決心ノ場合ニ不立至候。但山妻より賤女ノ意向為尋候ひしニ、金満家へ嫁するハ餘り好ましからすトノ事ニ御座候。それのみならず、小生ども夫婦ノ考にてハ生来愚鈍ノ賤女なれハ、前途未永ク相勤まり兼候ハんかと夫のみ杞憂罷在候のみ

ニ御座候。いつれ先方より正式の相談と相成候上にてハ、篤と相考も致し、尚又過日略御話申上候如く、其時こそ眞実貴兄ニ実地探索可奉願存候。其上にて左右可致候ニ付、前陳御含置被下度希上候。扱又差出置候寫真一葉ハ、御許迄御取寄置被下候へハ、当方へハ御序にて宜敷存候。○大阪神戸の画幅ハ一二葉過急もの揮毫の後直ニ取掛り可申候。御承知被下度候。先ハ右要詞拜答迄、草々頓首。竹垞生 二月廿五日 黒田幸三郎様

24 : 梁啓超尺牘 某年某月

木堂先生有道、前郵一書、想已達。所請之事、諒能見許。如已備得請處、斯函持參人盧君、為盼此請、道安。 啓超頓首

『中寫姓一統家系』

「中寫姓之由来」～「三ノ神子之系」

平崎 真右

二松學舎大学 SRF 研究助手

【解題】

『中寫姓一統家系』(嘉永2(1849)年)は、中島家医門四世の中島友玄(1808-1876)によって著された、先祖調査の記録である。家系に関する調査はこの他に『中寫親族支系』があり、これも友玄によって著されている。ここでは、『中寫姓一統家系』(「中寫姓之由来」～「三ノ神子之系」まで。資料については以下『家系』と表記)にのみ解説を加える。

『家系』では、まず「口演」と題したまえがき部分において調査の方法が述べられる。具体的には、①親類縁者への聴き取りや位牌・石碑の物質資料の調査(「老翁ニ逢テ話ヲ聞」「親族家に行テ位牌并石碑ヲ吟味シ昔の話ヲ聞」)、②過去帳の調査(「三世ノ祖玄古始テ調置シ過去帳ヲ探リ年歴ヲ押テ」と、大きく2点が挙げられる。「三世ノ祖玄古」とは医門二世・中島玄古(1715-1789)を指すが、玄古の父・友三(1685-1757)が半農半医であったのに対して、玄古の代では専業医として独立する。友玄は、この祖父・玄古が初めて過去帳を調べて年歴を押さえたと述べるが、医業を専門として独立した環境の変化が、自身の来歴を整理しておこうとする歴史意識(家意識)を玄古に与えたと推測される¹。

さて、本文は「中寫姓之由来」からはじまり、医家として独立する以前の系譜として「一ノ神子之系」「二ノ神子之系」「三ノ神子之系」と、北島神社付きの神子職であった家系について筆が及ぶ(「本家之系」以降は医家と神子家より分宅した家系が記される)。ここでは、注意すべき言葉と、注目したい内容について概観する。

まず、「中寫姓之由来」で友玄が語る「當山」は上寺山を、「鎮守正八幡宮」とは現在なお上寺山に鎮座する豊原北島神社のことを、「長沼山ノ嶺」とは千町川を隔てた上寺山南方一大雄山山系の西麓一に位置する小高い山を指す。この長沼山麓には現在も豊原南嶋神社が鎮座しており、北島も南嶋もともに宇佐八幡系統の宮となる。

ところで、この地に八幡が遷宮した伝承には2種類ある。1つは北島神社の社伝、もう1つは北島神社と隣接する寺院・餘慶寺に伝わる縁起(『餘慶寺略縁起』)がそれだが、友玄の語りでは、後者・餘慶寺側の縁起に拠っていることに注意される²。ただし各神子家の家系をみれば分かるように、北島神社付きの神子家中島氏は、分宅した神子家のほか、南嶋神社付きの神子家や他所の神子家にしばしば娘を嫁にやっていることにも注目したい。親族間における子女の婚姻には神子家そのものの維持を、他

所の神子家との婚姻からは同階層間におけるネットワークのあり方が伺えるようで興味深い。

また、神子家中島氏は池田光政（1609-1682）による寛文6（1666）年の宗教政策によって北島神社付きの神子職を務めた点にも注意したいが、この問題系については別に論じられていることからここでの重複は避ける³。ある一ノ神子による「法楽ト唱へ黒格子梓神子ノ如キ所作」が「法外ノ所作」として咎められ、その結果、他の神子家に檀家をとられるといった事情などは、岡山藩による政治レベルでの施策が地域にどのような形で影響していたのか、その一面を物語っていよう。

【凡例】

- ・翻刻に際し、使用する漢字は正字体、常用体の統一をせず、原資料に近い字体を採用した。また、記号（○など）も原資料に準じている。
- ・文字の大小、行間などは、可能なかぎり原資料を模している。
- ・判読不能文字については■をあて、推測可能な文字は（ ）で補い、判読は可能だが読みにくい漢字には【 】で読みを記した。

【資料翻刻】『中寫姓一統家系』（「中寫姓之由来」～「三ノ神子之系」）

嘉永二年酉三月記

二冊之内

中 寫 姓 一 統 家 系

大祖五世医門四世嗣子

中島友玄

■■之字又玄

今■（年）五十四歳

書中予ト記タルハ友玄自言詞ナリ

口演

十餘ヶ年前ヨリ意ヲ盡シ
先祖ハ勿論親族家系ノ因
縁ヲ糾シ老翁ニ逢テ話ヲ
聞親族家ニ行テ位牌并
石碑ヲ吟味シ昔の話ヲ聞
又三世ノ祖玄古始テ調置シ
過去帳ヲ探リ年歴ヲ押テ

漸■今年ニ至リ成就嘉永
二酉五月九日ヨリ十日、先祖供
養并水祭放生会ヲ修行シ
先祖親族ヲ招待シ終る
書中予ト記タルハ友玄自云辞也

目録

- 一 中寫姓之由来
- 一 一ノ神子之系
- 一 二ノ神子之系
- 一 三ノ神子之系
- 一 本家之系
- 一 予カ家之系
- 一 平八之系
- 一 和吉之系

中寫姓ノ由来

抑當山鎮守正八幡宮ハ人皇三十五代舒明天皇
六年辛丑豊前国宇佐ノ宮ヨリ當郡長沼山ノ嶺エ
御影向アラセ給ヒ同処ヨリ當山今ノ地へ勸招申スナリ
今嘉永二酉ノ年迄【まで】ニ千二百十四年ニナル尤モ上寺開基
報恩大師ノ草創孝謙帝ノ勅願所ニテ四十八ヶ寺ノ
其一ナリ天平勝宝元年ヨリ今嘉永二酉年迄千百一年
ニナル時ニ首坊本乘院高木乗坊ト了庸ト云僧寛文六年
国主池田新太郎光政公ノ命ニ依テ還俗ス今ノ祠官業
合氏ノ祖ナリコノ僧丹波ノ国業合ト云処ヨリ来リ僧トナル
ユへ還俗シテ姓ヲ業合ト号スルヨシ聞傳エリ
今嘉永二酉年迄二百八十四年ニナル本鎮守御影向アラセ
玉フ時吾大祖中寫何某豊前国宇佐ヨリ奉供メ来リ
神事ヲ主トルヨシ夫ヨリ當山へ御遷宮アラセ玉フ時當地
エ移リ神事ヲ主トル処ヨリ神子職トナル則チ今ノ一ノ神子
ト称スル家ナリ代々正一位ヲ領シ左近ト称ス夫ヨリ連綿ト
メ今ニ至■也往古ハ氏子十三ヶ村ヲ主トルニ一家ノ巫ニテハ
行届カサル処ヨリ分宅メ二ノ神子ト称シ又分宅トメ三ノ
神子ト称シ各檀家ヲ分ツヨシ二ノ神子ニ門前村ヲ譲リ
三ノ神子ニ五明村ヲ譲ル其外村々俗家ノ女ニ巫業ヲ教
エ檀家ヲ譲リシト也傳へ聞氏神上寺山へ御遷宮アラセ

ラレテ長沼村ノ人婦女小兒ナト参詣ニ路遠ク便ナラサル
トテ別ニ氏神ヲ勧招セシニ貧村ニテ宮ノ經營仕難ク折
柄中正寺ニ廢寺残リタル処へ先安置イタスヨシ故ニ今以
テ社前ニ鱒口カヽルナリコレ其證也右ニ依テ巫家ヘモ檀

家ヲ悉ク譲リ放チタルヨシ今以テ上寺ノ御宮ヲ本宮^{モトミヤ}

ト号メ毎歳八月廿四日五日祭式ヲイタスナリ又神寄
村ノ俗家ノ女ニ巫業ヲ授ケ其村ヲ譲リシ処後世ニ至タリ
氏神ヲ勧招セシニ神主ナキ処ヨリ巫ノ夫ヲ神職トナシタ
ルヨシ今岡崎氏ノ祖ナリ往古ヨリ今ニ至テ九月祭礼ニハ
必ス一ノ神子ヲ招請メ盃ヲ初メ次ニ岡崎氏ノ巫女戴キ其
次ニ家主戴ク例トナルコレ師弟ノ義アル故ナリ家主
盃ヲ把ルヲ遅キハ巫ヨリハ後ニ祠官メ兩職トナルユヘナリ
又濱村神子尾坂姓ヨリ白米一升三合正月元日古来ヨリ
立来リナリ其由ハ元来女子ヲ引請巫業ヲ教ヘ吾カ檀
家ヲ譲リシナリ其縁ニテ師弟ノ義ヲ以テ年玉トメ毎年
送り来リ也尔【しか】ルニ近世困窮ニテ送ラサル処ヨリ取りニ参

リシニ追々夫モ^レ呉^レ難キ処ヨリ一升三合ニ度々困リ手

間費ナルトテ甚蔵怒テ止ニケリ予其事ヲ聞及ヒ古来
ノ由縁ヲ断チテハ例ヲ缺ルユヘ甚蔵ヘ諫言イタシタレ
□（トモ合字）終ニ止メニケリ又多八郎代ニ濱村神子ト争論ニナリ
新地村ノ内仁橋ノ檀家濱神子ニ取レシナリ後世ニ至テ
ハ色々変化トナリ往昔ノ恩ヲ省シサルヲ不埒ノ至ナリ
○氏子十三カ村ハ神寄村長沼村新村濱村川口村新地
村射越村門前村五明村北地村上寺村向山村大富村ナリ
内神崎村長沼村ハ氏子ヲ離シ新村濱川口新地大
富村ハ別ニ氏神勧招ニテ半氏子トナリ純氏子ハ射越
門前五明北地上寺向山ナリ

○首坊本乗院ヨリ毎歳白米三斗一合立来リナリ
其由縁ハ本鎮守ハ本乗院構ヘノ時ヨリ立来リナラン
寺社相分リタレ□（トモ合字）古例ユヘ今以テ替サルナルヘシ
○多八郎室多弁発才ノ巫ニテ檀家ノ内死去後或ハ仏
事弔ノ後法楽ト唱ヘ黒格子梓神子ノ如キ所作ヲ内
分ニテ勤タルヲ向山田淵ニテイタスヲ大富村ノ神子兼
テテヲ掛テ終咎メ大論トナリ下濟ニ相成カタク上聞

ニ達寄奥ヲ受ケ終ニ向山田渕ノ檀家大富ノ神子ニ
取ラレシナリ又新地村ハ濱神子ノ構ヘナリシニ同村内
仁橋ハ一ノ神子ノ檀家タリシニ是又法楽トテ法外
ノ所作濱村ノ神子ニ咎メラレ終ニ濱神子ノ領ニ
ナルナリ

一ノ神子家系 今オモテト唱

大祖 先祖人名不詳素ヨリ社家ニ位牌ナク
鬼録ナク操出シトテ木片ニ姓名ヲ記
古ヨリ数多在リシヲ近世小兒ノ弄
翫トナシタルヲ予友玄コレヲ取り集
拾ヒヨセタレ□（トモ合字）紛失メ揃カタク歎カ
シキ事ナリ

小美野氏左近 大祖ノ分ハ紛失コノ木片ヲ拾ヒ記ス
元文三年戊午三月四日

先祖ヨリ左近ト云ハ代々正一位ヲ領シタル
名ナレ□（トモ合字）小美野姓ノ事不審也小美野姓
ノ内ヨリ来リタル巫ナルヤ不詳

光荣常心 父

玉心妙閑 母

施主中寫甚左エ門

往古ヨリ上寺山内ノ僧毎年七月ニ如
法會トテ供養アリ檀家有志ノ人ハ
亡靈ノ改名ヲ過去帳ヘ頼ミ毎年供養
アルナリ其過去帳ヲ探索スルニコノ名
アリ寛文年中大乘坊ト申セシ時ノ
事ナルヨシ其頃ハ仏法皈依ノ折柄ナ
レハ社家モ假リニ佛道トナル供養相
頼ミシヲナラン施主中寫甚左エ門ト
記シアレハ定テ當家先祖ナルヘシ因テ
コヽニ記ス

中寫傳七郎

宿洞了圓信士

假リニ佛道ニ願込ナランコノ繰出

寛保三癸亥五月五日 シモ拾ヒ集メシニ表ニ改名アリ裏ニ
中寫左近神女 俗名アリ
芳室妙勝信女 コレヨリ後ハ木主ノ位牌アリテ委シ
宝曆二申四月三日

子甚左エ門
幼名傳吉後変名ス外ニ兄弟アルヤ
不詳

甚左エ門忠安
明和八卯五月二日
室正一位左近神女
寛政八丙辰正月十九日

一男弥三右エ門
妻ヲ娶リ一女アリ名ハツキ後又於筆
トナル文化四年丁卯八月十七日四十歳ニテ
死ス外へ嫁シタル者カ神巫絶エンヲヲ
勞メ巫業ヲ嗣シヤ弥三左エ門独身
トナリ生涯多八郎ニカハル
二男傳左エ門
香々登村へ養子ニ行大工職ナリ
三男多八郎 家ヲ嗣ク

多八郎忠光
文政九戌八月廿三日行年八十四
室 左近
天保二卯七月三日

上通郡尾田美ヨリ来ル本俗人ノ
女ナリ生来神巫ヲ好ンテ同村ノ神巫ニ
業ヲ習ヒ是娶ルヨシ
一男藤左エ門
享和三癸亥十月晦日死
二男鉄次郎 家ヲ嗣
三男松四郎 早世
寛政十年七月十五日死

鉄次郎忠周

文政二巳卯十月十一日

室 小幾久

文政三辰七月廿六日 赤坂郡山口村神子ヨリ娶ル
姑アリ未タ受領セズ故ニ左近ノ名

ナシ

養女豊野

子無キユヘ上道金岡ヨリ養フ後牛
窓へ嫁ス

^{モリヒサ}
甚蔵保尚

天保十一子

七月廿八日 當処祢宜岡崎熊吉方忠吉変名
メ甚蔵ト名ク鉄次郎死テ小幾久
ノ後夫トナル小幾久死テ後妻ヲ娶ル
名ハ美称後左近トナル

室 左近 鹿忍村神子辨蔵女名ハ美称
後受領メ左近ト号ス弁蔵ハ二ノ
神子ト称スル家ヨリ鹿忍へ養子ニ行
ソノ女ナリ

一男弥惣次 家ヲ嗣ク
二男政吉 天保九戌七月十一日四才ニテ死
三女小登美 三ノ神子へ嫁ス
四女志津ゝ【づ】上道郡西庄ノ神子へ嫁ス
五男乙平

弥惣次

室宇多野 當村ノ内仁生神子利吉女嘉四郎
妹ナリ姑アリイマダ受領セス故ニ左
近ノ名ナシ

一女

二女

二ノ神子家系

大祖一ノ神子ト唱ル家ヨリ分宅ス
人名年号不詳

妙祐信女
享保十八丑八月三日

コノ位牌平八方門内ニ豊寫石ノ墓
室アリコノ内ニ在リ孫太夫母ト記メア
ルユヘニ因テ記スコレヨリ内証ナシイツ
頃分宅シテルヤ不詳

孫太夫
中嶋晴保信士
延享二丑十二月
廿九日

道清信士延享三丙寅正月朔日俗
名孫太夫ト書シタル位牌コレ又平八
方石室ノ中ニアリ石碑ノ名トハ相違
アリ假佛道ニテアル故ノヲナルヤ晴
保ト云ハ名乗ナトニテアトヨリ石碑ニ刻
タルヤ石碑ハ夫妻一所ニ三ツ社ニアリ
忌日一日違ヘ□（トモ合字）同人ニ相違ナシ

室
同室婦妓神女
明和三戌七月十六日

予カ本家ヨリ嫁ス予ヨリ四世ノ祖
友三ノ妹也左腹ガハリ也一ノ神子ノ
家ニテ神子職ヲ修行ス

女フミ 神子也コレニ孫平ヲ養子トス

孫平
真嶺知覚
明和三戌五月十日

當所東ノ谷ヨリ来ル今ノ金也ト云座
頭ノ家也金也死メ今ハ絶家ス素
東ノ谷ヨリ来リ殊ニ佛道願ノヲナル
ユヘ東ノ谷塚所エ葬ルヨシ塚ハ高柵
ニ在リ

室 婦美
寛政十二年庚申
二月廿六日

遺言ニ塚ハ三ツ社ニイタシ呉トノヲナ
レ□（トモ合字）孫平高柵ニ埋ムユヘ死メ高柵ニ葬
予カ三世ノ祖玄古ノ従弟也

- 一男 卯吉 家ヲ繼ク
- 二男 吉之介 後清左エ門ト変名ス分宅
ス今ノ平八父ナリ
- 三男 千吉 分宅ス今ノ和吉父也
- 四女 満津 長沼村ノ内中正寺ノ神子
末安彦九郎室ニ嫁ス今ノ藤八
ノ祖母ナリ

} この部分に【付札】

【付札】

末安氏ハ小左エ門也其子藤五郎也妻ハ和氣郡真庄ヨリ来
其子彦九郎也妻ハ二ノ神子ヨリ嫁スソノ子亀松也妻ハ上道
中尾ヨリ来ルソノ藤八也妻ハ邑久郡神子ヨリ来ル

寛政九巳

正月廿九日

五女 登毛 和氣郡井出屋村神子へ

嫁ス塚ハ三ツ社ニ在リ假リ墓ナリ
卯吉妻ノ母ナルヲ以テカリニ建ナリ

卯吉

予カ父宗仙ノ二従弟也

寛政十二申十一月

十五日

室

和氣郡井出屋ヨリ来ル

文政十亥二月朔日

一男 磯吉 家ヲツグ
二男 弁蔵 鹿忍村神子へ養子ニ行リ
生子四人アリ嫡女美称一ノ神子ノ甚
蔵妻トナル二女岩野上道郡大内村
神子へ嫁ス三女浅野金岡神子へ嫁ス
一女ヲ産メ後上道郡四ノ御神ノ神
子へ再嫁末子兼松家ヲ継ク

寛政十年 三女 長沼村中正寺神子末安亀松妻

戊午七月廿日

ニ嫁ス以病歿ル磯吉方ニテ死ス塚
ハ三社ニ在リ行年廿六而死ス末安
氏ノ室トアリ

磯吉

天保十二辛丑正月二日

室

和氣郡井出屋ヨリ来ル磯吉ト従弟也

天保八丁酉六月六日

天保三辰 一男 新吉 妻ハ上道町神田ヨリ娶ル一子

壬十一月十九日

弥吉ヲ産シ新吉死メ去ル

二女 那加 児ノ時怪我メ不具トナリ不嫁
 神子職ヲナス
 三女 京 磐梨郡原村神子へ嫁ス
 四女 加那 早世文政九丙戌七月十六日
 五男 甚左エ門 家ヲ嗣ク

甚左エ門 姉那加ト同居ス死メ那加一人トナリ
 卓忍信士 妹京ノ子ヲ囉【もら】ヒ居ル那加死メ原
 嘉永二酉正月 村へ販ル跡絶家ス
 廿日

三ノ神子家系

中島清太夫 コレヨリ前ニ先祖在シヤ否ヤ不詳
 寛保二戌正月六日 コノ塚三ツ社蓬蒿ノ内ニ埋タルヲ尋
 同妻於久里 子出シタル也二名一ツノ塚也利介存
 延享五辰正月十四日 生ノ間コノ塚ヲ先祖ト唱へ居ルヨシ土中
 ニ埋レ利介モ嘯ノミニテ不和ヨシ

恵入信士 コレモマタ二人一ツノ塚ナリ夫妻ノ
 明和九辰六月十七日 ノ塚ナルヘシ
 里与神女
 安永九子七月廿九日

神道於游久 コレ亦二名一ツノ塚也
 寛政八辰八月廿二日
 清順居士 俗名弥三郎
 安永二巳三月二日

丹信士
 寛保元

利介 大富ヨリ養子ニ来神子株ヲ継ク
 文政四巳四月 後独身ニテ和吉株ヲツク株ツキ
 廿五日 ノヲ別ニ和吉ノ系ヲ書ス

¹ また、玄古の代では現在もなお同地に存在する墓地が求められている（北島神社鳥居下墓地）。このような墓域整理も自身の来歴を調べる意識と通じているであろうし、友玄が調べた「石碑」の類も、あるいは玄古が求めた墓地に建立された墓石が含まれていたかもしれない。なお友玄が調べた「位牌」は、現在中島医家資料館で保管される先祖位牌のなかに該当物が見受けられる。

² 社伝と縁起のあいだにみられる記述の揺らぎ、またそれに付随する神子家中島氏の出自や南嶋神社側の伝える史料に対して注意すべきことは、以前に論及したことがある。平崎真右, 地域社会における宗教者たち—神子家中島氏とその位置づけを巡って—, 中島医家資料館・中島文書研究会編, 備前岡山の在村医 中島家の歴史, 京都：思文閣；2015, p168-p187。とくに p169-174 を参照。

³ 注2 前掲論文。とくに p174-p183 を参照。

『中寫姓一統家系』

「本家ノ系」～「和吉家系」

松村 紀明

帝京平成大学 講師

【解題】

『中寫姓一統家系』（嘉永2（1849）年）は、中島友玄（1808-1876）による自らの先祖調べの結果をまとめた記録文書である。

近世あるいはそれ以前において、「家」は構成者の地位・身分・職業といった社会的文脈を規定する基本要素である。そのため、先祖・家系に関する文書は歴史資料として極めて重要なものである一方で、しばしば構成者の願望を反映した事実の取捨選択が行われまた偽造の対象にもなり、信頼性が低い場合も少なくない。

実際、『中寫姓一統家系』は一族の構成者・友玄の手によるものであり取り扱いには注意が必要ではある。しかしながら、「口演」と題したまえがき部分において調査の方法が述べられていること（詳細は本誌44ページを参照）、登場する多くの構成者の生没年月日や墓所などが明確にされていること、近隣の村民・商家・神子・在村医・岡山藩家臣などとの縁戚関係についても多くが人名や発生年月日などが明確にされていること等、各々の記載内容についての判断材料が多数あり、信頼性についての評価は比較的容易な文書といえよう。

以下本稿では、『中寫姓一統家系』の中の後半部分（「本家ノ系」から「和吉家系」まで）を取り上げ、解説を加える（以下『家系』と表記）。北島神社付きの神子職から分家した家系を『家系』では「本家」と呼び、多四郎（1722（享保7）年没）をその「大祖」としている。以降、この本家・中島家は、宗教人なども輩出しつつも農を家職とする家系となるが、多四郎の子であり本家二代目の友三（1757（宝暦7）年没）は『家系』によれば医を学んだようである。これが、中島一族に医が持ち込まれた最初であり、『家系』のなかに登場する「医門」の表記の第一世（初代）ということになる。

しかしながら、友三の代は「医業閑暇ノ時ハ農業ヲイタスヨシ」と『家系』にあり、半農半医だったようである。友三のあと本家を継ぐのは五男の猪十郎（伊十郎）となるが、長男の元吉（のちの玄古。1789（寛政元）年没）が医を専業として分家し、ここに現代に続く医家・中島家が成立し、これを『家系』は「當家」と称している。以降『家系』のなかでは「當家之系」として哲（^{たもつ}医門第六世、医家中島家五代目。1842（天保13）年～1898（明治31）年）までが記載されている。

先に触れたとおり、『家系』のなかでは多くの中島家一族の幼名・医名・改名・別

名なども含む人名や生没年月日が明らかにされており、それらの記載内容は、中島家に残されている他の文書類の執筆者・内容やそれらの相互関係を検討する上での基幹データとなる。また、縁戚関係についても人名・生年月日・社会的属性などの記載が多くみられ、医家・中島家が近隣の村民・商家・神子・在村医・岡山藩家臣とどのような縁戚関係を結んでいたのかを辿ることができ、中島家だけでなく在村医の社会的文脈を検討する上で、貴重な資料となろう。

なお、「當家之系」に続いて、二ノ神子より分家した「平八家系」と「和吉家系」（いずれも農を家業としている）についても記載されている。

【凡例】

- ・翻刻に際し、使用する漢字は正字体、常用体の統一をせず、原資料に近い字体を採用した。また、記号（○など）も原資料に準じている。
- ・文字の大小、行間、朱書きなどは、可能なかぎり原資料を模している。

【資料翻刻】『中島姓一統家系』（「本家ノ系」～「和吉家系」）

本家ノ系 予カ家ヨリ本家ト唱

大祖 大工ヲ職トス今ノ一ノ神子ヲモテト
多四郎 唱ル家ヨリ分宅スコノ人本家ノ
悟山智了 大祖ナリ予ヨリ五世ノ祖ニ當ル年
享保七壬寅歲 曆ヲ考ルニ一ノ神子家傳七郎ト
十二月六日 云シ人ノ伯父カ又伯父カノ人ナルヘ
位牌ハ本家ニ シコレヲ予カ家ト本家トノ大祖
アリ トスコレヨリ家系ヨク詳也塚ハ上
寺山明王院寺内ニ在リコノ子敬真
法師僧トナリ明王院ニ住職ス父タ
ルヲ以テ寺内ニ葬ルヨシ今ノ明王院
寺ハコノ多四郎老年ニ及ヒ隱居役
トテ自身ノ存念ニ建立仕タルヨシ
聞傳ヘリ

室 上道郡竹原村神主根岸氏ヨリ
娶ル本家老婆ノ話ニ根岸半
之進ノ叔母ニ當ルヨシ子友三敬真
法師ノ二人ヲ産スコノ石碑吟味ス

レ口（トモ合字）在処不詳悟山智了ノ南ニ豊
 寫石ノ小塚アリ不詳ノ二字ハ明カニ
 分レ口（トモ合字）外ハ磨滅ス年号ハ享保十
 年巳十二月四日トアリ年曆ヲ押シ考
 ルニ悟山智了ヨリ後ノ死ナリサスレ
 ハ悟山智了後妻ヲ娶ル筈ナシ
 予案スルニ友三敬真ノ二人出生メ
 後故アリテ離別トナリ後妻ヲ
 娶トリ其先妻外へ嫁メ悟山智
 了ヨリ後ニ死シタルヲ敬真法師
 実母タルヲ以テ側ニ塚ヲ築キ
 供養シタル者ナランヤ又ハ友三敬
 真ノ二人生テ後死テ塚処分明ナ
 ラサルヤコノ塚ハ外人ノ塚ナルヤ本
 家ニ位牌モナク古老ニ尋ルニ一向
 不詳

一子

友三 家ヲ嗣ク
 傳へ聞父多四郎大工ニテ岡山石山寺
 圓務院へ雇ワレ行折柄友三ヲ
 召連レ寺ニテ茶酌ナトノ小用ヲ勤
 メサスヨシ扱又カノ寺内へ出入ノ医
 者アリコノ医者連販リ医業ヲ
 教へシト也予案スルニ又多四郎
 友三ヲ召連レ行ト多四郎先妻
 死タルカ又ハ離別シタルカニテ友三
 ノ置処ナク連行トナルヤ又ハ継母
 ニ托シ置トヲ心配ニ思ヒ連行トニ
 ヤ人情ヲ押テノ考ナリ

二男

敬真僧都 延享三丙寅正月廿日
 行年五十一才
 出家メ上寺山明王院寺ニ住職ス
 塚ハ明王院内ニ在リ

継室

秋岸妙詣

宝曆元辛未

閏六月十七日

邑久郡下山田村内石堂大工伊三郎
 ヨリ来ルヨシ本家老婆ノ話ヲ聞ク
 ニ中風ノ疾ヲ患ヒ中風婆々ト云ヨシ
 娘二人出生メ一ノ神子ト唱ル家ニテ

塚ハ鳥居前 巫業ヲ学ヒ姉ハ竹原村堀田氏へ
ニ在リコノ人 嫁シ妹ハ二ノ神子ト称スル家へ嫁ス
本家ノ塚始メナリ予考ルコノ鳥井前ノ畑ハ玄古求
タル證文アリ玄古本家ニ同居シナカラ自身求タル
ナランイマダ塚処ナキヲ以テ初テコノ地へ葬ルナランコ
ノ時玄古ノ両親共存生也

三女 神子トナリ上道郡竹原村堀田へ
嫁ス今ノ武四郎ノ家ナリ

四女 婦妓同神子トナリ二ノ神子ト称
ル家へ嫁ス孫太夫室也

友三 医ノ祖也医業予ニ及テ四世ナリ
祥雲桂徳 聞伝ニ医業閑暇ノ時ハ農業ヲ
宝曆七丁丑九月 イタスヨシ
二十日在年七十二塚ハ鳥井前ニアリ

室 邑久郡藤井村ヨリ娶ル今ノ五人
叔蓮智光 組頭武三郎ノ家也姓ハ万代今
安永六丁酉六月十日行年八十四塚ハ鳥井前ニアリ
八十吉ト云大工アリコノ人ノマタ叔母ニ
當ルヨシ

一男 元吉 医ヲ継キ分宅ス予カ家
ノ祖ナリ後玄古ノ字ニ改ム

二男 吟三郎
竹原村根岸氏へ養子ニ行神主
職ナリ

三男 敬快阿闍梨
上寺山明王院ニ住職ス塚ハ明王
院寺内ニ在リ

四女 幾与
豆田村ノ内八丁小兵衛室ニ嫁ス今
久吉ノ母ナリ今絶家ス

五男 伊十郎 家ヲ嗣ク
農ヲ業トス

猪十郎 多四郎孫ニメ友三ノ子也兄玄古
芳岩貞樹 医業ニテ分宅ス依テ家ヲツク

寛政元酉九月二十四日塚鳥井前ニ在リ

室 上道郡浅川村ヨリ娶ル今ノ

冷覚妙相 恵三郎叔母ナリ

文化五辰十月八日塚鳥井前ニ在リ

一女

鹿忍村甚三郎妻ニ嫁ス四子ヲ
産ス嫡男甚之介家ヲ継二男
周介後富右エ門ト称ス當家子
幼ナルヲ以テ養子トス三女南幸
田村ノ内西大寺屋勘蔵妻トナル
四男長四郎分宅ス

二男 勇介 家ヲ継ク

三男 敬純

明王院ニテ敬忍ノ弟子トナリ小僧
ノ時死ス僧名中納言

勇介 農ヲ業トス後村内ノ判頭役トナル

圓靈義空

天保十三寅八月廿三日塚三ツ社ニ在

室 名ハ里宇竹原村神主根岸吟

深入妙唱 三郎娘ナリ従弟夫婦ナリ

弘化二巳十一月晦日行年七十七塚三社ニ在リ

養子 富右エ門

初名周介鹿忍村甚三郎二男也
勇介ノ甥也勇介子無キ以テ幼
少ノ時ヨリ養子トス

二女 琴

勇介ノ女也遅ク出生ス初沖新
田医者近藤氏へ嫁ス縁アラスメ
門田村医者里住見隆妻ニ嫁ス
一男出生メ見隆死ス一子ヲ連舩
後御老中土肥ノ家来岡武左エ門
妻トナル又一子ヲ産ス尔ルニ二子
トモ不幸ニメ死ス後自身故郷ノ里
ニカヘリ終妹キミノ嫁シタル上道
郡八幡村ニテ死ス

三女 幾美

上道郡八幡村七エ門室ニ嫁ス
子男女二人ヲ産ス

富右エ門 鹿忍甚三郎二男幼少ニテ養
子トス勇介甥ナリ村内ノ判頭
トナリ後五人組頭トナル

室 婦佐 上道郡今在家村ヨリ来ル勇
慈室妙貞 介妻ノ姪ナリ母ハ竹原村根岸氏
文政六未十月廿六日ヨリ至ル

塚鳥井前ニアリ

良智童女 一女 志田牟 早世
文政五年七月二男 作蔵 家ヲツク
十六日十二才三女 美加

塚鳥井前ニ在 邑久郡西片岡村片岡敬左エ門
妻トナル

作蔵 富右エ門子也農ヲ業トス五人組
頭トナリ後名主トナル

室 名ハ也須上道郡八幡村
作蔵ト従弟也

一女 幾奴 家ヲ嗣養子上道郡庄崎村
ヨリ来名ハ由蔵

由蔵 農ヲ業トス一女ヲ産ス死テ後上道
中野村ヨリ再ヒ養子ス

室 名ハ幾奴一女ヲ産ス後夫ニモ一女アリ

一女 名ハ小与称 射越村野寄鹿太郎
妻ニ嫁ス

二女 未津

當家之系

先祖ノ系一ノ神子ト称ル系ニ委シ故ニ

コハニ畧ス
 十余ヶ年以前ヨリ心ヲ尽シ親族ノ家
 系ヲ正シ老翁ニ逢テ話ヲ聞一族ニ行
 テハ位牌石碑ヲ改メ古キ話ヲ聞キ
 又祖父玄古始テ鬼録ヲ調置シヲ見
 テ年曆ヲ探リ漸々今年成就スル
 ナリ依テ五月九日ヨリ十日ニ至リ先祖
 供養并ニ水祭放生会ヲ修行イ
 タスナリ
 嘉永二年酉ノ春家系ヲ改メ記ス

医門第四世嗣子

中島友玄五十四歳

名ハ玄字ハ又玄

中島玄古	友三ノ子ナリ医ノ二世也
徳壽總貫	予カ家ノ大祖也予ニ至テ三世本家
寛政元巳酉	ヨリ分宅年号不詳明和七庚寅四月
六月六日行年	三階土蔵普請帳アリ宝暦十年
七十四塚鳥井前	辰ノ配剂帳アリ年齢凡四十四五才ニ
前二在リ	當ルコノ時分分宅シタルモノナランヤ 安永八亥ノ年六十四才ニテ苗字ノ 御免アリ 伊勢講本家ト組替リシヲハモト大 講ト唱へ役家或神主神子其外大 家ノ講組ナレハ弟猪十郎農業ニテハ 心勞多カルヘシトテ講ヲハ玄古持テ 分宅スル也弟ハ百姓組へ入ヘシトテ 講組カワリシ也ト聞伝フ

室	邑久郡濱村幸田屋藤五郎娘ナリ
栄室智盛	姓ハ阿部氏今要蔵ノ家也三子
宝暦三癸酉	ヲ産ス
六月二日年二十八	
塚ハ鳥井前ニ一子	幸之介七才ニテ死塚処不詳三ツ社
アリ	辺ニ在ナラン宝暦三癸酉五月廿五日
唯加幻空 二子	通三幼名真吉医ヲ業トス

安永二癸巳 三女 鶴四才ニテ死宝曆六丙子七月三日
十二月廿六日行
年二十五塚鳥井前ニ在リ

繼室 濱村幸田屋阿部藤五郎二女也栄
瑤林妙薫 室智盛ノ妹ナリ二人ヲ産ス塚ハ上寺山
宝曆七丁丑六月 吉祥院寺内ニ在リ考ルニ藤五郎檀那
廿五日行年三十 寺ナルヲ以テ相頼ミ葬ルナラン
四男 文吉當才ニテ死ス宝曆六丙子七月十日
五男 権律師敬忍上寺山明王院ニ住職
ス寛政十一未年九月十九日行年四十三
塚ハ明王院寺内ニ在リ

繼室 上道郡倉田村ノ内中寫ヨリ娶ル今
鶴林妙樹 ノ文吉ノ家也子五人ヲ産ス
安永五丙申五月十三日行年四十五塚ハ鳥井前ニ在リ
六男 辰弥六歳ニテ死ス明和二乙酉八月十一日
円應理貞 七女 名ハ知加玄古老テ医業継キ難キヲ
天明元辛丑五月 患ヒ岡山ヨリ養子ス名ハ奥悦也知加
廿日行年十八才 産後死テ奥悦去ル
塚鳥井前ニ在リ
八男 喜次郎八才ニテ死ス

安永二癸巳三月廿九日塚鳥井前ニ在リ
栄室智盛ノ西地藏アリコレナリ
泰道理覚 九男 貞侃幼名義三郎家ヲ嗣医ヲ業
寛政九丁巳九月 トス天明七未八月岡山木畑貞因へ普代
十四日行年二十八 願ヲナシ貞侃ト医名ヲ改ム夭死ス
十男 恵吉医名宗仙家ヲ相續ス

繼室 邑久郡大富村ノ人俗名ムラ後ハナト
操淳妙意 改ム今権九郎ノ養母ノ姉也コノ人
天保十一子歳 廿一才ノ時下女奉公ニ来リ知加義三郎
六月十一日行年 恵吉ノ三人ノ幼稚ノ世話ヲイタシ玄古
八十五才 モ其神妙ナルヲ感シ又ムラ女モ子供ノ
名ズクヲナレハ他ニ嫁スルニ忍ヒサルヨシ
ニテ玄古コレヲイタワリ役介人ニ願込
生涯ヲ遂ク文政十亥年御上ヨリ御

褒美トメ御米五俵頂戴ス子無
キヲ以テ大富村兩親ノ墓地へ葬リ
吳トノ遺言ニ任セ同処字ハウルシ畑ト云
処へ葬ル友玄ノ代也
御褒美御書下ノ文ニ云

邑久郡北地村医者
中寫宗仙役介女ムラ

右之者生質実貞ニテ身持宜ク今
宗仙三代以前ヨリ同家エ致奉公其
頃主人元古妻相果候砌ニテ幼稚三人
之撫育家事之世話可引請者モ無
之勝手向モ難渋之折柄相仕候処勤
方至テ宜子供ヲ大切ニ致シ其上家事
万端無費様取向子供之内娘一人相
果候砌モ看病手厚ク都テ平常志
之忠義成ルヲ主人モ致感賞三十九年
以前同家役介人ニ願込遣シ其後
元古致病死候節病中モ念比ニ介抱
致シ死後弥以テ家事引請彼是心
ヲ配リ子供兩人致養育居申内又々
元古嫡男家主義三郎相果同人弟
今宗仙ハ其節猶若年ニテ跡家相
續甚タ危ク相見エ候処種々身心ヲ
勞シ宗仙ヲ成長致サセ岡山又ハ京師へ
遣シ医業ヲ学ハセ諸作之無指支様
女ナガラ甲斐々々敷取斗其所ヨ
リ宗仙モ追々医業宜相成療治発
向致シ終ニ苗字ヲモ御免被成中
奥勝手向モ取直シ家名相續致シ
候モ其謂レ全ク武良数十年之勤
功顕レ候様子ニテ甚実意厚ク至
テ奇特之趣ニ相聞候仍テ為御褒
美御米五俵被下候

宗仙
精勤逸總

名世讀字ハ子述幼名惠吉十六歳ニ
テ父玄古ヲ喪ヒ兄貞侃医業ヲ續キ

居士
天保十一庚子
正月廿九日夜五
時卒在年六十七
塚鳥井前ニ在リ

タル間西大寺河野意仙ニ随ヒ医ヲ学
ノ間兄貞侃死メ止ムヲ得ス家ニ販リ
役介人武良ト同居メ開業セシニ素ヨリ
家貧ク業モ不行バ日々衰微ノ趣コ
ノ時廿四才也寛政十二申年岡山御医者
木畑貞朴ノ普代弟子願ヲイタシ同年
ヨリ翌享和元酉年迄廿七才廿八才ノ
間京師ニ游学メ吉益周介南涯先生
ニ随テ古方ヲ学ヒ其外産科外科ヘ
入門メ医術ヲ修行シ販国メ業盛ニ行
レ上京中雜費并古借財等早速ニ
償シヨシ聞伝リ三十一才ニテ妻ヲ娶リ
三十六才ニテ文化六年巳九月御上ヨリ
姓御免ヲ賜リ四十六才文政二卯年肥
前長崎ニ遊学ス夫ヨリ業大ニ行レ
其後御上ヨリ御目見医者仰付ラレ
□（トモ合字）固ク辞メ肯ハス凶年ナドニハ村民ハ
勿論他村ノ貧民ヘ米麦或ハ金子ヲ以
テ救ヒタルヲ度々アリ文政八酉年四国
順拝ス歳六十七ニテ病死ス

同室
精室慈芳
天保八丁酉六月
六日行年五十七
塚ハ鳥井前ニ在
月相妙扇 一女
天保八丁酉六月
廿三日行年三十三
死後連販リ當
家塚処ヘ葬ル鳥
井前ニアリ
恭英童子
俗名正平天保
十二丑八月廿二日塚ハ鳥井前ニアリ

幼名タカ後タキト変名ス西大寺山口
伊八郎娘也文化元子年廿四才ニテ
宗仙妻トナル日夜家業ヲ營シ実ニ
家ヲ興セシナリ

幼名由宇後多美ト変名ス岡山
平野町平野屋庄二郎妻トナル一男
子ヲ産ス正平ト名ク困窮ニ因テ離
別ス後西大寺岡崎林之介後妻ト
ナル一女一男ヲ産ス岡山平野屋ハ橋本
姓ナリ正平事ハ當家ニ養育メア
レ□（トモ合字）不幸ニメ十二才ニテ病死ス

二男 友玄 家ヲ嗣ク

英苗童女 三女 名ハ志宇
 文政五年五月 十二才ニテ痘ヲ患死ス
 十九日塚ハ鳥井前ニ在リ

友玄 名ハ玄也字ハ又玄幼名八百吉後金
 吾ト変名ス父ニ随ヒ医ヲ学廿三才文
 政十三寅年岡山池田信濃守様御医
 者武井養貞ニ願込普代弟子トナル
 廿六才天保四巳年京師ニ遊学メ吉益
 周介北洲先生ニ随ヒ古医方ヲ学小石
 元瑞并藤林泰祐ニ入門メ西洋医法
 ヲ学又奥道逸ノ門人緒方順節并
 清水大学ニ随ヒ産術ヲ学高階清
 介トテ花岡ノ門人アリ随テ外科ヲ学
 三十八才弘化二年巳三月廿五日苗字ヲ
 御免ナサレ又四十六才嘉永六年丑五
 月十八日御目見医者ニ拜セラル

同室 名ハ登和沖新田九番川口屋佐之介
 清岳智秀 娘姓ハ田中氏十七才ニテ娶ル一男子
 天保八丁酉六月 ヲ産ス
 十五日行年十九
 一子 玄章幼名玉之介医業ヲ續キ
 十八才ニテ普代弟子願ヲナシ名ヲ変

継室 岡山池田信濃守家中野宮佐右エ門
 常念妙法大師 娘幼名ヒデ後千代ト変名ス四子ヲ産ス
 明治九年新二月十二日行年五十五才
 清遊童子 二男 舛之介四才痘ニテ死ス
 天保十五甲辰五月廿二日塚鳥井前ニ在リ
 梅童女 三女 梅二才ニテ死
 弘化二乙巳九月廿三日塚鳥井前ニ在リ
 蓮萼妙香 四女 比佐
 元治元甲子七月 兄玄章死スルヲ以テ養子ス磐梨郡
 廿四日行年十九 沢ノ原ノ内山吹木梨元貞弟同名順
 塚鳥井前ニ在リ 策文久二戌年ニ招キ一女ヲ産ス名

和哥野童女 ハ和哥野五才ニテ病死ス比佐死メ
明治元辰七月八日 順策去ル
塚島井前ニ在リ
 五女 満佐東幸崎村医者廣井寿庵
 ノ末子ヲ養子トス幼名武右エ門
 医名哲射越村ノ内和田ニテ和田家
 ヲ續シム

玄章 友玄嫡男幼名玉之介医ヲ業トメ
芳心諄性 玄章ト変名ス子二人アリ廿五才ニ
万延元申七月 テ死ス
十一日行年廿五塚島井前ニ在リ

同室 名ハ多加西大寺岡崙林之介二女也
 予カ姪也玄章ト従弟也幼少ノ
 時ヨリ予カ家ニ養育ス子二人ヲ産

前代

一子 良民医業ヲ好マス依テ和田家元
 来々農家ナルノ故ヲ以テ哲ト交代ス尾
 張村江川寿太ノ姉ヲ娶ル
二子 正二郎兄ニ従ヒ和田家ヲ名乗ル
 岡山藩家臣村上庸義ノ女ヲ娶ル

哲 良民医業ヲ好サルフ以テ和田家ヲ
 良民ニ譲リ中島家繼續ス

同室満佐

 嫡子 一太
 長女 雪枝
 二女 豊
 三女 嘉寿枝

一太

同室千代 和氣郡片上村濱京屋中村光二郎

二女

平八家系 二ノ神子ヨリ分宅ス

吉之介 後清左エ門ト変名ス二ノ神子孫平

浄入了玄 ノ二男ナリ農ヲ業トス

文化二丑十二月十六日

同室 鹿忍ヨリ娶ル名ハ津知

善覚信女 文政七申二月廿二日

子平人 家ヲツク

平八 農ヲ業トス旁桶屋職ヲ作ス

同室 當所東ノ谷幾之介娘也兄柳藏
鍛冶職也今絶家ス名ハカ子

一子 惣介 家ヲツク

二女 美与和氣郡真庄村へ嫁ス

三女 米藏上道郡益野へ養子ニ行

四女 未支娘ニテ死ス

五女 与志金岡へ嫁ス

六女 須美長沼へ嫁ス

惣介 農ヲ業トス

同室 邑久郡邑久郷ヨリ娶ルモト南幸
田水門へ嫁ス一子嘉吉ヲ産ス夫
死メ後嘉吉ヲ引連惣介室トナル

一子 嘉吉南幸田水門ノ子也父ハ藤太
郎死別

二子 平吉

三子 婦美

和吉家系 二ノ神子ヨリ分宅

- 千吉 二ノ神子孫平ノ三男平八家ト合
理空信士 分家也農ヲ業トス
寛政十二申正月七日
同室
法山恵成
文政八酉十一月
廿三日 一子 孫四郎家ヲ續キ弟和吉ハ三ノ神子ト
唱ル利介独身ナル株ヲツキ養子トナル
二子 和吉利介ノ株ヲ續シニ兄孫四郎放
蕩ニメ家業ヲ守ラサルユヘ利介ヲ不
縁メ家ヲ嗣ク
三女 上道郡尾多美神子佐吉ノ室ニ嫁
- 和吉 兄孫四郎放逸ニメ家相續仕カタク
和吉利介ノ養家ヲ不縁メ家ヲツク
孫四郎ハ自身トメ片上ヘ養子ニ行
和吉ハ独身ノ利介ヲ世話イタシタル
ヨリメ不縁ナカラ神子株ヲ持販リ相
續スシカシ妻俗家ヨリ来ルユヘ神子
職ヲナサス一ノ神子ヘ預ケ置農ヲ業
トス和吉父千吉分宅シタレ□（トモ合字）家
ノ株ナク和吉ノ代ニ至ルマテ平八方ト
同帳ナリ尤社家ヨリノ分宅ハ叶ハサル
御政事ニテ余義ナク猶豫イタス也
和吉利介株ヲ續キ神道トナル
- 同室 名ハ津也當処東ノ谷吉兵衛娘ナリ
弘化三年正月三日
一女 早世
二男 重三郎 家ヲ續
- 重三郎 神道也農ヲ業トス
- 同室 名ハ小登美一ノ神子甚蔵娘ナリ

始テ神子職ヲツク子ナキヲ以テ
圓張村梅松ノ三男ヲ小児ヨリ養子
トス名ハ伊三郎小登美多情ノ質ニ
メ他人ト密通逐電処ヲシラス

中島醫家資料館所蔵『胎産新書』解題・翻刻（1）

清水 信子

二松學舎大学文学部非常勤講師

【解題】

『胎産新書』は、江戸後期、備前で活躍した漢蘭折衷医、難波抱節（1791-1859、通称立愿、諱経恭、字子敬、号抱節、鳩窠、柯集菴）が著した、妊婦の産前、臨産、産後、また嬰兒に関することなど産科全般にわたる総合的な産科書で、当時の産科、産術の実態が知られるものとして、産科史の研究に資するものである。

著者抱節は、寛政3年（1791）、備前金川篠野家に生まれ、のち、難波家経寛の養嗣子となった。文化8年（1811）京都に遊学し、吉益南涯（1750-1813）に古方を、賀川蘭斎（1771-1833）に産科を学び、また大坂では華岡青洲（1835-1760）に外科を学び、文化12年（1815）、帰郷すると、開業するかたわら御津郡金川の妙覚寺にて学塾思誠堂を開き、その学を広めた。嘉永3年（1850）には、緒方洪庵（1849-1863）から種痘術を学び、種痘の普及にも努め、安政6年（1859）、コレラの治療中、感染し死去した。

『胎産新書』の成立は天保年間（1830-1844）。大別すれば10巻本と2巻本の2種の系統があり、いずれも刊行はされず、写本で伝わるのみである。

10巻本は「産前門」上下「臨産門」「変生門」「産後門」「血證門」「嬰兒門」「雜門」「手術門」「図式門」「方劑門」の全10門からなり、2巻本は上巻に「胎前門」上中下、下巻に「臨産門」「血證門」「嬰兒門」の全4門で、いずれも各門にさらに子目が立てられている。10巻本は各門の概要のほか著者抱節が見聞したり実際に処置したりした具体的症例が患者の地域、年齢とともに記され、またそれら症例の一部に関しては巻九「図式門」に図示されている。よって本書は同時代の産術、産科、そして実際に臨産にあたる医師にとって直接的に有用な実践の書となっている。一方、2巻本は、中国古典医書から引用し、抱節の按語を付した理論が中心で、臨床より研究に主眼を置いたものとなっている。

諸本は、現在両系統あわせて10点が確認される¹。10巻本系は中島醫家資料館所蔵本（以下略「中島家本」）、内藤記念くすり博物館本（以下略「くすり博物館本」、巻6至10闕）、岡山市立中央図書館所蔵本（以下略「岡山市立図書館本」）、正宗文庫所蔵本（以下略「正宗文庫本」、巻9、10闕）、杏雨書屋乾々斎文庫所蔵本（以下略「杏雨

¹ その他、中山沃『備前の名医 難波抱節』（山陽新聞社、2000.1）には著者中山氏蔵本が紹介されており、巻数については不明であるが、2巻本の系統と考えられる。

十巻本」、巻9、10 闕)、そして著録内容は同系統ながら巻6 までで巻7 以降原闕の杏雨書屋阿知波文庫佐伯理一郎旧蔵本(以下略「杏雨阿知波本」、杏雨書屋大塚文庫(以下略「杏雨大塚本」)の7 点。いずれも書写年代不明の江戸後期写本で、書誌事項、本文前付の有無、また本文の異同などにより、中島家本とくすり博物館本、正宗文庫本と杏雨乾々齋本、岡山市立図書館本、そして杏雨阿知波本と杏雨大塚文庫の4 系統の書承系統に分かれると考えられる。

2 巻本は京都大学附属図書館富士川文庫に2 点と杏雨書屋乾々齋文庫に1 点の計3 点。これらには書承関係があり、まず三河吉田の村医浅野謙輔が抱節の私塾思誠堂において謄写したものを、吉田侯医官進藤玄常が移写し、それを贈られた師の清川玄道(1792-1859、伊沢蘭軒門人で蘭門五哲の一人)が嘉永元年(1848)に本文の脱誤、校異を眉欄に書き入れ、句読を付したものが京都大学附属図書館富士川文庫蔵本(以下略「京大清川本」)、次いでその京大清川本を底本として伊沢蘭軒(1777-1829)の嗣子榛軒の養子伊沢信淳(1835-1875、号棠軒、清川玄道に学ぶ)が嘉永4 年に(1848)に移写し、その4 年後の安政2 年に校点を加え、眉欄に校異を書き入れたものがもう一方の富士川文庫蔵本(以下略「京大伊沢本」)、そしてその京大伊沢本を蘭軒門の山田業広(1808-1881、号椿庭)が慶応3 年(1867)に移写し、さらに校点を加え、眉欄に校異を書き入れたものが杏雨書屋乾々齋文庫蔵本である。

これら諸本のうち10 巻本系の中島家本とくすり博物館本のみ序文、凡例を示す「例言」、「引用書目」など本文前付が備わり、これらから本書の著述の背景などがうかがえ、またこれら二本が諸本の中でも完成稿に近いものとして注目される。特に中島家本については、10 巻本の中で最も巻数が備わっており、また同家第4 代友玄(1807-1876)は本書著者難波抱節の嗣子経直(1818-1884)と交流があり、第2 冊は難波家蔵本が混入しているなど、諸本の中でも著者抱節に近いものとして重視される。そこで今回中島家本『胎産新書』のうち、伝写が稀少な本文前付部を翻刻する。

翻刻にあたって、中島家本の基本的書誌事項を紹介する。

胎産新書 10 巻 難波経恭子敬著 [長谷川原泉(直記)・門脇志賀介・水田謙益] 画
高山謙道益等校 江戸後期写本 全9 冊(第2 冊別筆)

書式：(第1、3~9 冊) 書型 25.2×17.5 無辺無界 10 行 20 字 墨筆返点・朱筆送仮名、朱筆傍注 (第2 冊) 書型 25.9×17.4 単辺有界 19.6×13.1 9 行 20 字 版心題「胎産新書」版心下部「思誠堂蔵」 墨筆返点・朱筆送仮名(朱筆書入は全冊同筆)

外題：書題簽「胎産新書」(第2・3・4 冊)

印記：(第2 冊)「備前金川／難波蔵書」

前付：①「序」末「嘉永七年小春朔江戸丹波元堅菫庭撰于奚暇齋」(6 行 16 字、全4 丁) ②「胎産新書序」末「天保十四年歳在癸卯冬十月朔／信州州羽 源宜識」(11

行16字、全1丁）③「胎産新書序」末「日出 帆足万里」（11行16字、全1丁）
④「自序」末「天保十五年甲辰上元／難波経恭識」（9行16字、全3丁）⑤「序」
末「時安政二年乙卯春三月上巳日男経直撰于岡山僑居」（9行16字、全4丁）⑥「例
言」（9行16字、全3丁）⑦「引用書目」（全3丁）⑧「胎産新書総目次」（全5丁）
*①序は岡山市立図書館本、⑧目次は岡山市立図書館本、正宗文庫本、杏雨十卷本
にも著録される。

本文：「胎産新書卷之一／備前 難波経恭子敬著／門人 | 備前 高山謙道益／美作
蟲明善元長／武元信忠怨卿 | 同校」末題「胎産新書卷之一 終」（全13丁）以下
至卷九

（巻2以下各巻校者事項、巻頭、丁数）

巻2「河内橋玄輝南明／播磨室井務時敏／平安池田吉謙貞／産前門下」（全43丁）

巻3「大坂田中顕美君業／備中馬越元孝通潤／備前蓮岡周監讓輔／臨産門」（全
30丁）

巻4「日向水築簡太可／紀伊竹村育賛平／遠江阿部徳＝（ネ＋容）[裕] 夫／変生門」
（全30丁）

巻5「備後小林亨子敬／遠江三輪文明見龍／三河豊田柔鉦剛／産後門」（全30丁）

巻6「三河山崎良讓平／備中三宅亨元甫／肥前原口善元長／血證門」（全30丁）

巻7「備中藤野篤君敬／加賀鮭延温良節／周防三浦温文良／嬰兒門」（全40丁）

巻8「豊後横山貞子亨／青木順道藍川／備前明石純仁卿／雑門」（全37丁）

巻9「図式門」（首題編著者事項無し）（全36丁）

第2冊のみ難波家旧蔵の別筆。全編にわたり墨筆による返り点と、朱筆による句点、
送仮名、和訓など訓点が付されているが、朱筆の訓点については、第2冊の難波家本
も同筆のため、該冊が難波家から移入後に中島家にて書き入れられたものであろう。

【翻刻】

凡例

- 一、表記は原則として原資料の通りとし、使用漢字については正字、新字を統一せず、異体字など現行の文字コードにない文字については、原資料に近い字体を採用した。
- 一、明らかな誤記については、原表記のあとに正しい文字を「」内に記した。
- 一、返り点、添仮名については、原則として原資料の通りとしたが、返り点の不足については、読みやすさを考慮し、「」内に補記した。
- 一、句読点について、原資料ではすべて同一の点(①丹波元堅序のみ「、」、その他は「。」)で記されているが、文意によって適宜判別し、不足と思われる箇所については読みやすさを考慮し、「」内に補記した。
- 一、改丁は「」で示した。

①嘉永七年(一八五四) 丹波元堅「序」

多紀元堅(一七九五—一八五七、号菫庭、本姓丹波氏)は、医学館教授、奥医師。多紀元堅と抱節との直接的な関係については未詳であるが、抱節は自身の門人高山道益を通じて、自著『続類聚方』とともに本書の序の執筆を乞うた。

序

庖丁之解^{スル}牛也、曰、臣以^テ神遇^フ。而不^ニ以^テ目視^一。吾謂^ク此言也其足^ニ以^テ盡^ク醫之道^一乎。夫醫之治^{ムル}病、亦唯神^ノ遇^ニ也己矣。雖^レ然所^レ謂神^ノ遇、豈易^レ道耶。必^ト也志乎^カ、盖人之才與^ニ不才^一自有^ニ天分^一。吾不^レ得^レ論^ル惟立^ル志之能確^{ナル}然後爲^レ學¹オ¹之精、其可^ニ以庶幾^一焉。爲^レ學之精、在^レ求^ル之古人^一。講^ニ藥病之理^一、必究^ニ其歸^一。必逢^ニ其原^一然後識之卓^{ナル}可^ニ得^テ而言焉。識之、能卓^ク臨^レ危而不^レ惑。蹈^レ險而不^レ懼。其於^ノ遊^ル刃也、恢々乎其有^ニ餘地^一。夫然後能建^ク回^一天之績于逵^一。巡咄^一嗟之際^一亦不^レ難也。此謂^ニ之神遇^一矣。歡^ニ今之醫^一ウ¹往々命^ル意太高不^レ知^ル求^ル之于古人^一而胸^ニ中先有^ニ成^一竹^一孟浪鹵莽、坐誤^ニ人命^一。尚何問^ニ學之精^一而識之能卓^一。而況神^ノ遇乎。仲景曰、學則亞^レ之、多聞博識、知之次也。以^ニ

仲景之聖^ニ其言葉既如此^ニ。則吾輩亦烏可^レ不下^ル以^ニ自學而進^ニ、遂詣^ニ神遇之妙^一爲^レ上^レ志乎^一。及^テ讀^ム備前難²オ^一波子敬所著胎産新書^ヲ知^ル下^ル其人有^レ見^ニ于此^一者^上。盖其^レ爲^レ書^ニ其爲^レ書^ニ凡古^一今諸^一家事關^ニ妊^一育^一者、靡^レ不^ニ網^一羅^一薈^一萃^一。折^ニ哀^一「衷」群^一言^一歸^ニ之一^一是^一加以^ニ歷^一年試^一驗之所^一得^ル、亦條^一記而登^ニ載^一之^一施^レ術之巧^一將^ニ使^レ人擊^レ節^一三^一歎不^レ已焉^一。曩^{サキニ}者子^一敬就^ニ余弟^一子州^一人高^一山道^一益^ニ齋^一續^一類^一聚^一方及是²ウ^一書^一、以請^ニ弁言^一「一」余事^一務鞅^一掌、特序^ニ其類聚方^一未^タ遑^ラ及^ニ是書^一。今歲久^一留^一米醫^一生、權^一藤直、將^ニ遊^一余門^一「一」道過^ニ子^一敬。子^一敬懇^ニ囑^一督^一促不^レ輟^一。直寓^ニ其家^一旬餘。親覽^ニ其施術^一「一」因爲^レ余說^ニ達^一生之巧^一非^ス時^一流所^ニ企及^一。余於^レ是益有^レ知^ル子^一敬之能以^レ神遇者^一仍枯^三嘗所^ニ持^一論^一以題^ニ其端^一「一」3オ^一子^一敬其或有^ニ

首肯^{スル}「一」嘉永七年、小春朔、江戸丹波元堅菫庭、撰^ニ于奚暇齋^一3ウ^一

②天保一四年（一八四三）源宜「胎産新書叙」

源宜は、抱節が京都遊學時に漢學を学んだ服部大方（一七七〇—一八四六、本姓沢氏、名誼、通称星溪）。大方は信濃に生まれ、京都で私塾を開いたのち、岩代二本松藩藩校敬學館の教授を務めた儒医。

胎産新書叙

産^一育自^一然也。雖^ニ萬^一物草^一木^一、生^一生所^レ由^一、皆同^一。何矧^一人乎。然人或失^ニ之於智巧^一與^ニ動搖^一。所^ニ以有^一産科之道^一也。蓋賀^一川子^一玄^一子、能發^一明設^レ技、以救^ニ危險^一。皆古人之所^レ不能也。加有^ニ子靜^一、克補^ニ其闕^一。以愈精也。昔者、江^一戸直^一學^一士、柴栗^一山先^一生、序^ニ其産論翼^一云、事起^ニ於聖没千^一載之後^一而不^レ可^レ易者^ト。亦信矣^一「一」但命以爲今之世、

未^{サレハ}廣通^{タケクシ}二夫遠^ノ一西開^ノ一剖之說^一、以集成^セ上則不^レ盡也^一。
 文^ノ學社^一盟備^一前難^一波子^一敬、世業^スレ醫^ヲ〔〕兼^ヌ内^一外^一科^一〔〕且^ハ產科^ハ學^ニ之於子^ニ靜^ニ一克窮^{クム}二⁴オ^一其技之奧^一。
 頃者、著^シ二胎^一產新^一書^一、遠對^ク致質^一正、且請^フ二子序^一焉。予閱^{スルニ}之、杲矣^{ナリ}〔〕其集成^{スルノ}者也。又所^レ謂青出^テ藍^{ヨリ}一而青^キ於藍^{ヨリ}一者哉。天下之爲^ス二產科^一者舍^テ此^ヲ其誰由^ニ哉。以^{オモエラク}備前^ノ爲^レ國、芳烈^一公以^一來、文^一武特^ニ熾^一盛。然未^タ聞^レ二方^一技之透^一出者^一也。子^一敬其人^カ子^一敬人多著^{クサル}レ書。如^ニ瘡^一瘍新^一書^一、亦多^ニ發明^一。尤爲^レ有^レ用而刊行^ハ必始^レ自^レ胎^一產新^一書^一、蓋以^テ贊^{ムルヲ}二天道生^一生之化^一爲^{セハナリ}レ急也^ト。廼序、以還^レ之云。

天保十四年歲在癸卯冬十月朔信州州羽 源宜識^{4ウ}

③帆足万里〔一八五二以前〕「胎産新書序」

帆足万里（一七七八—一八五二、字鵬卿、号愚亭）は、日

出藩校教授、また私塾西崦精舎を開く。抱節は子の経直を遊学させたことから交流が始まり、万里も抱節のもとへ門人を送り出している。

胎産新書序

東^一方以^レ醫鳴^ル者衆^シ矣。花岡之瘍^一科、賀^一川之免^一乳、是其尤顯著^{ナル}者也。花岡之用^ル刀固巧^{ナリ}矣。而臟^一腑之輸、肯^一繁之會、或有^レ不^レ察比^ル二之西人^一、蓋少^ク遜焉。賀^一川之於^ニ免^一乳^一、提舉^一擣^一按、從^レ勢導^レ之。割截^レ不行。母^一子兩^一全、其巧往々出^ツ二西^一人之上^一。西^一人固刻^ク二其書^一而行^レ之。難^一波子^一敬、兩傳^二其術^一。日^一夕講^一究、其進^一駿々乎未^{ルナリ}レ已也。近、著^ス二胎^一產新^一書^一。已精且博。其爲^{ルヤ}厚^キ於後世^ニ也至矣。余少治^ム二窮^一理之言^一。嘗笑^{テフ}二西人^一之陋^一。而材^一力綿^一薄、不^レ能^四精^一巧俊^一偉、克有^ク三樹^{5オ}一立^{スル}如^ニ二子^一之爲^一。竊愧^レ之。至^{テハ}其明^シ二筭^一數^一制^一器^一械^一料^一夷^一貊之謬^一、以壯^{スルニ}中神^一州之氣^一上、不^レ過^レ望^ム二之豪^一

傑之士後出者、及子敬請_レ序、遂叙_ニ其意_一。眞_ニ之簡首_一。蓋美_ニ子之能_一、而偉_ニ子_一敬繼_レ述之功_一也。日出 帆足萬里撰_ウ」

④天保一五年（一八四四）難波經恭「自序」

自序

創_ム業者固難矣。守_レ成亦不_レ易焉。於_ニ吾術_一亦然。蓋其始立_レ法、言簡_ニ而旨深_一。故後之學_レ道者、非_レ得_ニ其人_一、則_レ不能_ニ講_一明以盡_ニ其極_一也。我邦産_一育之道、創_テ於賀_一川子_一、而_ニ成_ル於蘭_一齋先_一生_一。先_ツ於子_一、玄_一子者、有_ニ吉_一益中_一條鹿_一嶋之諸流_一。僅論_ニ方劑_一、而疎_ニ於手術_一矣。夫生生不_レ已者、天地之大德也。然而亦有下_レ可_レ不_レ假_ニ手_一於人_一者上_一。譬_ニ諸稼穡_一、猶_ニ天地生_レ之_一、人₆力成_レ之_一。一遇_ニ難生之證_一、則折_レ副之患立_至。自_レ非_ニ挽_一助

整頓、假_ニ手_一於人_一豈能獲_レ免乎。子_一玄_一子有_ニ慨_一然于斯_一。其人以_ニ非_一常之才_一、焦_ニ思_一於手_一術_一、探_ニ前_一哲未_一發之蘊_一、闡_ニ曠_一古不_一傳之秘_一、以康_ニ濟生_一、霧_一者不_レ鮮矣。乃有_ニ産_一論之撰_一。養_ニ子_一子啓繼_ニ其業_一。更著_ニ翼方_一、並行_ニ于世_一。嫡子有_ニ齋翁_一、別開_ニ門戶_一、亦頗有_レ所_レ得_一。及_ニ其長子蘭_一齋先_一生_一、箕_一裘相_一承_レ、其方與_レ術愈備_ル。賀川氏之學至_レ此大成矣。而後親炙_者私_一淑₆者、亦各呈_レ所見_一。或贊_ニ述_一之、或排_ニ斥_一之。雖_ニ互有_一得_レ失_一。要_レ之不能_レ出_ニ其範圍_一也。文化辛_一未之春、予遊_ニ於京師_一、受_ニ業_一吉益南涯先生_一。又從_ニ蘭齋先生_一、學_ニ免乳之術_一。朝肆夕講、沈_レ研鑽_一、極_ニ已辭歸_レ郷_一。施_ニ之於實地_一、得_レ驗者甚多。因以爲欲_レ盡_ニ技_一術_一者、宜先窮_ニ其理_一。理者本也。術者末也。其本不_レ窮、則其末不_レ可_ニ得_一而盡_ニ也。於_レ是援_下

撫前^シ一哲格^ト言^ト與^中近^ト一世至^一論能發^コ明^ス產^一育之理^一者上^一、竊附^ニ己鄙見^一、以折^ニ其衷^一。7オ^一名曰^ニ胎^一產新書^一。欲^レ使^下後^一學之徒^一、推^コ究其理之奧^一、而益盡^中其術之妙^上也。庶幾於^ニ守^レ成之業^一、不^レ爲^レ無^レ所^ニ輔^一相^一焉。然病無^ニ定證^一、術有^ニ竒正^一。裁而適^ニ其宜^一存^ニ乎其人^一。若不^レ然則雖^ニ子^一玄^一子之書^一、亦不^レ免^レ爲^ニ之糟粕^一。而況於^ニ予所^レ論理與^レ術乎。高明之士、原^キ其心^一而亮^レ諸^一。

天保十五年甲辰上元難波經恭識^{7ウ}

⑤安政二年（一八五五）難波經直「序」

序
余承^ケ二家^一學^一一歷^コ涉醫籍^一、每^レ覽^ル一^ニ子^一玄^一子胎位之論、及^レ施術之說^一。以爲^如二有^レ神祐^レ之者^一。嘆^一慕不^レ能^レ已^一。獨恨不^レ得^下生同^ニ其時^一、親聞^中其

論^一矣。今竊歡^ニ時^一流所^レ爲^ス、藐無^ニ實學^一、徒修^ニ邊幅^一。惟精惟視^ル。偶^一然奇^一中、以爲^ニ自得^一一遇^ニ重困^一「困」難^レ起之證^一、狼^一狼失^レ措不^レ知^レ所^レ爲^ス。而居^レ之不^レ疑。以終^ニ其身^一。可^レ悲已^一。「家君欲^レ救^ニ其弊^一、有^レ二^一年于茲^一矣。嘗遊^レ京入^レ紀受^ニ業吉華^一二子^一、產技則^{8オ}從^ニ子^一玄^一子之孫、蘭^一齋先^一生^一、受^ニ其秘^一訣^一。學成而歸時、有^ニ吾道西^一矣之嘆^一。家君已得^ニ此道^一、卓^ニ立於^一一世^一、一^一視同^一仁、以謂^レ醫之爲^レ道^一一言蔽^レ之曰仁。其論^レ道施^レ治、新^一意巧^一妙醫化漸布^ニ于四^一方^一。以^レ病來迎者滿^レ門。弟子自^ニ遠方^一至者日益衆。嘗謂^ニ弟子^一曰、醫之治^レ病、天機已去者、無^レ可^ニ能活^一之術上。其可^レ活者能使^ニ之治^一耳。況天下^一之求^レ治者無^レ限。吾之施^レ治者有^レ限。以^ニ有^レ限者^一應^ニ無^レ限之求^一。亦難^シ矣。不^{8ウ}若^カ立^レ言設^レ論、以治^ニ醫之病^一也。救^レ醫一人、何止

活^{スノミナラン} 數千人^ニ而已。而不^リ獨施^{スノミナラ} 之於當時^ニ。亦垂^ル 之於無窮^ニ。所^ル謂仁者^ハ杲在^ハ于斯^ニ乎。或云意之所^ニ 解、口莫^シ能宣^ク 虛著^ク 方論^ヲ、終無^レ益^ニ于世^ニ。 是獨善^ニ其身^一者之言、而非^サ以下^{ナリ} 以^ニ司^一命^一 自任者之^{スル} 心上也。若^キ初^ニ學之士^一、非^レ言無^ニ以取^ル 法^ヲ。非^レ法^ニ 無^ニ以施^レ治^ヲ。孟^子不^レ言乎。引而不^レ發躍^一如也。 亦何疑^ソ焉。是則家^一君平^一常之持^一論、而產^一育之道、 世少^ニ成書^一。因^テ尤盡^ス 心^ヲ于此^ニ。以爲^ラ古^ク「⁹オ」人有^レ言。 生^一人之原、必本^ニ於胎育^一。孫^一眞^一人著^ス 書^ヲ。先置^ニ 婦人方于卷首^一。亦爲^レ是也。於^レ是先著^ニ胎^一產新 書^一。專以^ニ救生^一爲^レ主。不^ニ屬^{スル} 以^ニ葬辭^一。務取^ニ 後進之易^一辨。而其所^下以進^一退消^一長、虛^一實竒^一 正、提^テ其要^ヲ、鉤^シ其玄^ヲ、探^テ天^一下之至頤^一、發^中 造化之微蘊^上者、子^一玄^一子之後、未^タ有^ラ盛^{ナル}於此 書^一者也。余幼^ニ而遊^ニ浪花^一時、適家^一君東^一遊攜往^テ

見^ル 吉^一 華^一 子及蘭^一 齋先生^一。因^レ是得^{タリ} 少聞^ニ 其道^一。既^ニ而西遊^ニ筑豊^一歸^レ則先生已辭^レ世。9ウ^ニ 子亦逝矣。累^ト累^シ如^ニ喪家狗^一。爾^一來復居^ニ草蘆^一益 習^ニ聞家學^一。頃^一年^一來寓^ニ岡山^一。與^ニ二三童生^一、 咀^シ嚼^ニ子及先^一生之術^一、道^ニ奉家君之教^一。驗^ニ之 病^一者、其言與^レ病適^ス。毫無^ニ乖戾^一焉。今也幸茲書 之成。雖^モ才^一識淺^一劣、不^上能洞^ニ視^一 玄微^一、庶幾 乎得^レ免^ル 顛^一倒錯^一亂、戕^ニ伐^{スル} 生^一命^一。如^ニ夫時 一流之所^一爲矣、所^レ謂仁者^ハ、亦將^ニ由是而有^ニ得之 日^一矣。是亦家君之賜也。受^ケ讀業卒之日謹序。時安 政二年乙卯春三月上巳日男¹⁰オ^一 經直撰于岡山僑居

⑥ 「例言」

例言

一 柯^一集^一 菴^ヲ以爲^レ醫家立^ル 方^ヲ。先調^レ經^一則能受^ク 孕^ヲ。

既受^ニ孕^レ則爲胎^ト前^ト。十月滿^一足則爲臨^ト產^一。既^ニ產^{スレハ}則爲^ス產^ト後^ト。次^ニ第^ニ皆有^レ方^一。此^ニ女^ノ科^ノ之^レ大^ニ概^也。尤得^{タリ}其^ヲ宜^一。然證^一候多^一端^ニ易^シ致^ニ混^一淆^一。非^ス三^ノ門^ノ之^レ所^ニ能^ク包^{スル}括^ス。今更增^{マニシ}數^ニ門^一、每^レ門^ニ數^一條、猶^ラ綱^ノ之^レ與^一。目使^{シム}易^ニ識^シ別^一也。其不^レ屬^ニ一門^一者、別立^ニ雜^ノ門^一。

一 此編本以^ト胎^ノ產^一爲^レ主^一。而及^フ衆^ニ疾^一。蓋婦人難^キ生育^一者、多^ハ由^レ有^ル他^ニ疾^一。小^一兒^ノ初^ニ生^一亦不^レ可^ラ忽^{ニス}焉。然婦兒治^一法、率與^テ大^一方^一無^レ異^一。故^ニ唯^ル舉^ル初^ニ生^一將^レ護[、]及^テ數^ニ證^一而已^一。

一 諸證有^ニ產^ノ前^ノ後^ノ兩^ノ有^レ之^者一。皆於^テ產^ノ前^ノ門^一併^セ論^ス焉。如^キ水^一腫^一泄^一瀉^一類^一是^也。

一 編中所^レ引^レ諸^ノ書、文辭體^一裁不^レ一。今不^レ論^ニ古^一今^一雅^一俗^一。皆遽^ニ本^ノ書^一、但係^ニ本^ノ邦^ノ俗^ノ文^一。寫^{スル}以^テ漢^ノ文^一。雖^モ已^ニ用^ニ其^ノ文^一、拙^一陋^一難^ニ通^一曉^一者、

或有^レ所^ニ改^一竄^一。蓋醫書性命之所^レ關^ル、貴^ニ平^一生^一10」易^レ讀^一。非^ス修^レ辭^ノ闕^一巧^也。雖^ニ野^一史^ノ貝^ノ典^ト、有^ニ事^一可^レ取^一、則舉^テ以^レ徵^レ之^也。亦非^ス術^ノ博^也也。

一 古書有^ニ論^ノ說^ノ相^ノ同^一、而文異^ニ詳^ノ略^一者。務取^ニ其^ノ易^レ通^一者。不^ニ必^一由^ニ時^ノ代^ノ前^ノ後^一、且或名或字、書^一名稱^一號、無^レ有^ニ定^一例^一。覽者諒^{セヨ}焉。

一 胎^一孕^一形^一狀^一、論^一辨^一頗^一詳^一。然有^下非^ニ圖^ノ式^一不^レ可^レ得^テ辨^一者^上。覽者宜^ク參^レ觀^一以^レ有^レ考^一。11」

⑦「引用書目」
引用書目

醫書部

素問	靈樞	傷寒論	偶意草	景岳全書	濟陰綱目	醫學入門
金匱要略	肘后方	病源候論	東醫實「寶」鑑	溫疫論	醫燈續焰	保産心法
脉経	脉訣	千金要方并翼	石室秘録	産經	類經	醫心方 ^{12ウ}
外臺秘要方	顛顛経	産寶	大徳濟陰	産意草	錦囊秘録	醫宗全「金」鑑
聖恵方	聖濟總録	三因方	幼幼集成	産類本草	集驗良方	格知「致」餘論
産育保慶	濟生方	醫説	明醫指掌	産論	張氏醫通	産寶百問
續醫説	儒門事親	婦人良方	奚囊便方	産科指南	達生論	産生録
大全良方	蘭室秘蔵	求類鈴方 ^{12才}	董西園醫級	産科發蒙	痘科鍵	普渡慈航
直指方	丹溪心法	醫學綱目	種痘新書	産科新論	丹臺玉案	濟陰纂要
傷寒六書	便産須知	醫學正傳	胤産全書	産科隨劄	褚氏遺書	女科撮要
普濟方	古今醫統	萬病回春	簡便方	産科新論	董氏集驗方	衛生易簡方
壽世保元	濟世全書	神農經	證類本草	産科新論	産科要訣	保生碎事
本草綱目	本草彙言	本草原始	産論	産科新論	救正論	推拿秘法 ^{13才}
名醫類案	赤水玄珠	證治準繩	産科指南	産科新論	證治要訣	壽域神方
外科正宗	外科秘録	瘍醫大全	産科發蒙	産科新論	産論翼	保産機要
					産科隨劄	産科全書
					女科隨劄	女科漫筆
					産科新論	坐婆筆「必」研

安生論	丹水子	北山醫話	物理小識	五雜俎	夢溪筆談
叢桂偶記	生象止觀	解體新書	家寶全書	一家言	寄園寄所寄
奇疾便覽	蔓難錄	洛醫彙稿	塵餘	輟耕錄	西陽雜俎
萍州可談	東朝食鑑		崔行功纂要	古今秘苑	陳眉公聞見錄
儒書部 13ウ			胡元瑞筆叢	羅圭峯文集	秋燈叢話
詩經	易經	禮記	洗冤錄	白虎通	正字通
論語	周禮	蒙引	字典	字彙	玉篇 14ウ
左傳	國語	公羊傳	全天錄	玉芝堂談薈	事文類聚
家語	莊子	管子	因樹屋書影	琅琊代醉編	皇極經世書
淮南子	文子	戰國策	文獻通考	續文獻通考	異苑
史記	前漢書	後漢書	野史	嵩山記	瑯琊鈔
魏志	晉書	三十國春秋	夷堅志	菽園雜記	檜園
魏畧	遼史	博雅	語怪	螽斯集	粧樓記
通雅	廣雅	說文	留青日札	扁海類篇	言鯖錄
說原	大玄經	楊氏方言 14才	七修類稿	搜神記	游官記聞
楊氏法言	博物志	續博物志	畫墁錄	舜水談綺	陸可彥隨筆
釋名	西京雜記	獨異志	佛書部 15才		
顏氏家訓	蠡海集	遵生八牋	法華經	法苑珠林	大素經

寶石經	俱舍論	修行道地經
元亨釋書	有綠經	大藏一覽經
因果經	毗婆論	釋氏要覽
和書部		
日本書紀	續日本書紀	延喜式
三大實錄	類聚國史	中右記
源氏物語	萬葉集	袖中鈔
定嗣郷日記	拾芥鈔	東鑑
大日本史	築「筑」紫風土記	北条九代記 15ウ
逸史		

右二百三十五部

編集後記

中島醫家資料研究第1巻第2号をお送りします。現在の日本において、分野を問わず学問・研究を取り巻く環境には厳しいものがありますが、とりわけ歴史研究においては、社会的環境だけでなく自然災害の多発も大きな悪影響が懸念されるところです。そのようななか、本資料館の研究活動が徐々に広がり、微力ではありますが岡山の郷土史や日本の地域医療史研究の一助になればと、願う次第であります。(松村)

ISSN 2189-387X

中島醫家資料研究 第1巻第2号

2019（平成31）年3月31日 第1刷発行

編集 松村紀明、木下浩

発行 一般財団法人 中島醫家資料館

〒701-4232 岡山県瀬戸内市邑久町北島1241

ウェブサイト：<http://nakashima-ika.jpn.org>

電子メール：shiryokan@nakashima-ika.jpn.org

印刷 港北出版印刷株式会社

本研究はJSPS 科研費 16K01166 の助成を受けたものです。

(研究課題名「幕末から明治期における地域医療研究 ～岡山県邑久郡の中島家をもとに～」)